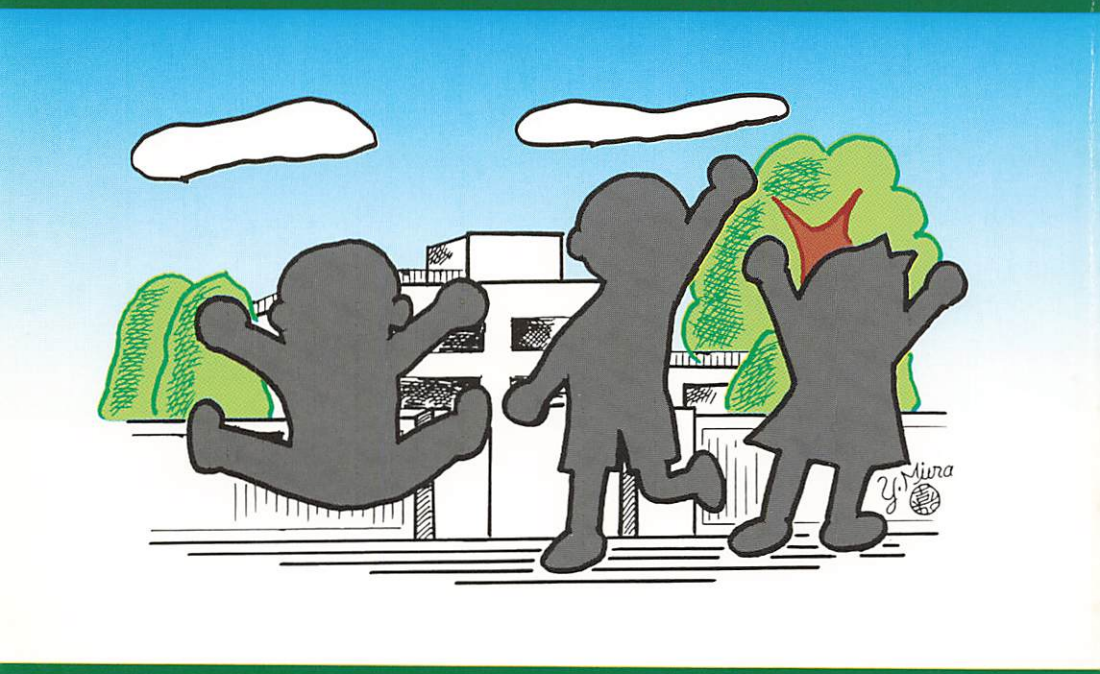
第二回 教文研教育シンポジウム記録

不登校をめぐって Part2

―― 子どもたちの明日へのメッセージ ――



神奈川県教育文化研究所

シンポジスト

・阿部富美子
（平塚市立江陽中学校教諭）

・中西　拓子
（茅ヶ崎子どもサポートネット相談員）

・竹内　直樹
（横浜市立大学医学部小児精神科助教授）

コーディネーター

・菅　龍一
（児童文学作家・和光大学講師）

1992年10月24日(土)
於：平塚市教育会館

○**司会**　皆さん、こんにちは。

土曜日の午後、また本日は足元の悪い中、神奈川県教育文化研究所の教育シンポジウムにご参加をいただきまして大変ありがとうございます。

ただいまから第二回の教育シンポジウムを開催させていただきたいと思います。

本日のテーマにつきましては、既にご案内のとおりでありますが「子どもたちの明日へのメッセージ」ということで、深刻な状況を増しております不登校をめぐってということで、そのことについてこの後意見発表、意見交流ということで進めさせていただきたいと思っています。

それでは開会に当たりまして、主催者を代表いたしまして、神奈川県教育文化研究所の所長であります倉持巳佐男からごあいさつをいたします。よろしくお願いいたします。

あいさつ

○**倉持県教文研所長**　皆さん、こんにちは。

今、ご紹介をいただきました、神奈川県教育文化研究所所長の倉持でございます。

きょうは、悪天候の中を土曜日の午後、多数ご参加いただきまして、本当にありがとうございます。

冒頭にちょっとこの機会をかりて、県教育文化研究所、略して〝県教文研〟と言っておりますが、そのことについて触れさせてもらいたいと思います。

と申しますのは、第一回のシンポジウムのときに、感想の中で、県の行政機関がどうだというような話がありまして、教職員はもちろんわかっているわけですけれども、一般の父母の方でその辺がはっきりしない方もいらっしゃるかと思いますので、念のために申し上げたいと思います。

神奈川県教育文化研究所というのは、県の行政の一つの機関ではございませんで、これは今から十二年前、一九八〇年の五月に神奈川県教職員組合の教育振興基金によってつくられました、県民の教育文化の向上に寄与することを目的とすることを掲げて活動している機関でございます。略して〝教文研〟こう申しておりますので、よろしくお願いしたいと思います。

この教文研が開設以来、その事業の一つの大きな柱として、教育相談室を設けて、広く県民の皆様からの教育相談に対応してまいりました。電話相談が主でありますが、年々、相談件数も増加をいたしまして、内容も多岐にわたってまいりました。ちなみに昨年度の教育相談状況を数字で申し上げますと、相談件数合計二八七件、そのうち小学生関係が一一四件、中学生関係が一二七件、高校関係が三二件、その他一四件となっております。

内容は、生活、性格、あるいは非行、学業等一四種別にわたっておりますが、この中で不登校が八五件で最も多く、約三〇％を占めております。相談をされる方は圧倒的に母親が多くて、全体の九四％を占めている状況でありまして、この登校拒否、不登校の問題は、全国的に年々増加をしてまいりまして、今、一つの社会問題化しているという状況については、皆さん、既にご承知のことと思います。

不登校児童生徒数は、全国的に見ると、六万人に至るというふうに報じられております。昨年度の神奈川県の学校基本調査によって五十日以上の欠席者、大体これが不登校の数に近いわけですけれども、これによりますと、小学校が七七五人、中学校が二四四二人、合計三二一七人、前年に比べると

三三八人の増加という状況になっております。

今、この不登校の問題というのは、教育の中に大きく深刻な位置を占めるようになってまいりました。学校はもとより国・県・市区町村、あるいは各種団体、民間の団体等で、その対応、解決、研究、実践の努力が真剣に根強く続けられているという状況でございます。

こうした中で、不登校、かつては「登校拒否」と言っておりましたが、不登校への関係者の認識も大きく変わってきていると思います。さかのぼれば「学校恐怖症」と言われた時代、それから「学校ぎらい」「問題児」「学校不適応」という問題で今進んできていると思います。

そのために不登校の子どもたちを学校へ適応させるのにはどうしたらいいかというところに焦点が向いておりますけれども、学校へ行かないという行動を問題にするよりも、行きたい自覚があっても行けない気持ちを理解し、大事にすることが大切であるという段階に進んできていると思います。

この十月一日に発表されました、ある研究会の報告書、この研究会は文部省が補助金を出していて、大学の先生、あるいは不登校問題の専門家の方々で構成をしている研究会であります。この中でどんな成績の者でもだれでも不登校になるということをはっきり述べております。だれでも不登校になる、ということは、本年の三月の文部省の学校不適応対策研究協力者会議の報告にも明記されている事項でして、既にご存知の方もおると思います。

また、文部省はこの九月に不登校の子どもが、学校内施設で相談指導を受けた日数を出席扱いとすることを、各都道府県教育委員会に通知をいたしました。その中で学校は児童生徒にとって安心できる心の居場所でなければならない。児童生徒の立場に立って、人間味のある温かい指導が行われるようにしなければならないということも述べております。

不登校に至る原因は、比較的単純なものもございますけれども、実に複雑に絡み合ったものもござ

います。それぞれが子どもたちの心の中でさまざまな葛藤を引き起こし、学校に行けない気持ちをつくっていると思います。したがって、不登校への対応、指導はケース・バイ・ケース、千差万別と言えると思いますが、いずれにしましても、不登校の子どもたちの心を理解する。このことが基本であろうと思います。学校も家庭もそうだと思います。

本日は、不登校をめぐるもろもろの問題について、三人のシンポジストの先生方から、それぞれ専門の立場からお話を伺い、そのお話をもとにご参会の皆様のご意見や、経験を交流し合って、限られた時間でありますけれども、実り多いシンポジウムになりますことを希望してやみません。

終わりに、本日のこのシンポジウムの開催に当たりまして、いろいろとご協力、お力添え、ご後援を賜りました中教組、中地区教文研、平塚市教育委員会、県教育委員会に深く感謝を申し上げてあいさつにかえさせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

○**司会**　続きまして、この開催地を代表いたしまして、中地区教育文化研究所の所長であります加藤良輔所長よりごあいさつをお願いいたします。

○**加藤中地区教文研所長**　こんにちは。ただいま司会の方からご紹介をいただきました、地元の中地区教育文化研究所の所長をしております、というよりも、平塚の春日野中学校の教員をしております加藤と申します。

本日は、大変足元のお悪い中、平塚市教育会館にお集まりいただきましてありがとうございます。

「不登校をめぐって」というテーマできょうシンポジウムが開催されるわけでございますけれども、残念ながら、第一回目、昨年相模原でこのシンポジウムが行われましたときに、私、仕事のためお伺いすることができませんでした。その記録が既に発刊されておりまして、きょう

受付の方にもあったかと思います。それを読ませていただきました。

また、昨年まで二年間という短い間ではございましたけれども、本日の主催者でございます神奈川県教育文化研究所の教育相談委員会というところに籍を置かせていただきまして、いろいろな事例等について学ばせていただき、また自分なりの考えも述べさせていただくという経験もさせていただきました。

そういった中で、今、こういう仕事にございますので、いろいろな場面でいろいろなお話をさせていただきますが、この春に平塚市のＰＴＡ連絡協議会という会がございましたけれども、そこの総会でこういうお話をさせていただきました。

今、私たち、特に学校現場で日常的に子どもと触れ合う仕事をやっている我々にとって、今の教育、とりわけその中で学校教育にさまざまな鋭い課題が突きつけられている。不登校という問題も、実は学校教育、もちろんそれだけではなくて、社会全般の物の考え方、あるいは社会教育、家庭教育、さまざまな場面で、日本がこれまで突き進んできた教育のあり方、教育というものに対する日本の国民の物の考え方に鋭い刃を突きつけている大きな課題ではないか、そういうふうに受けとめております。

そういった中で、非常に難しいことは私もわからないわけですけれども、その場にお集まりのお父さん方、お母さん方に私がお話をさせていただいたのは、私たちは、これまで教育というものを、「子どもを失敗させないように仕込んでいくのが教育なんだ。」そういう受けとめ方をしてこなかっただろうかということです。そうではなくて、自分の子どもは最後の最後は必ず立ち直る。だけれども、そこにいく過程の中ではさまざまな失敗もするし、過ちもする。その中で子どもが何を学びとっていくのか。それが本来教育のあるべき姿ではないか。

学校で働く私たちも、あるいは親御さんも、実はそういった教育のあるべき姿、子どもの本当の心

の成長、体の成長だけではなくて、心の成長を積んでいく中で考えていかなければいけない大事なことを見失っている部分がないのか。そういうお話をさせていただきました。

ですから、先週、実はお隣の図書館の方で、これは神奈川県の教育を守る会という会がまたあるわけですが、そこでも不登校をめくっての講演会が行われました。そこでもちょっとごあいさつをさせていただいたんですが、我々が考えていかなければいけないのは、我々、大人の社会、あるいは学校の教師、あるいは学校という、こういった中で教育に対する一つの価値観だけで子どもに接し、子どもにそれを押しつけてこなかったのかどうなのか。そういった課題も考えるわけでございます。

学校現場で働いている私ども教職員のそういった仲間でつくっている、教育文化研究所でございます。そういった意味では学校教育のさまざまな課題について、さまざまに実践的な研究も積み重ねながら神奈川の教育や、あるいは中地区の教育、平塚の教育の今後のありようを研究していく。そういう機関の代表として、学校現場の我々にそういった突きつけられている課題というものを、正確にその目指す課題が何を言っているのかということをきちんと把握をし、地域の方々や親御さん、そして何よりも子どもたちが我々に期待する学校教育のあり方、こういったものを我々改めて構築し直していく。つくり上げていくということを、きょう、お集まりの皆様に、時間はかかるかもわかりませんけれども、お約束をさせていただきたいと思います。

きょう、これから行われますシンポジウムの中で、シンポジストの方々、あるいは討論に参加される方々、論議に参加される方々の発言の中に、我々が学校教育の中で何をやっていかなければいけないのかという、そういう示唆を大いに与えていただけるのではないかということを期待しながら、地元を代表してのごあいさつにかえさせていただきたいと思います。

本日は、本当にお忙しい中をありがとうございます。（拍手）

○菅（コーディネーター）　それでは、教文研主催シンポジウム「不登校をめぐって」第二回をはじめます。今回のサブタイトルは「子どもたちの明日へのメッセージ」であります。前回は、サブタイトルが「子どもの心を探りよりよい対応を考える」という題でしたから、一歩先に進ませ、子どもたちの明日へのメッセージを送るという内容でシンポジウムを行いたいと思います。

それではまず最初に、学校現場におられまして、いろいろとかかわっていらっしゃいます阿部先生から体験に基づいたお話を聞かせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○阿部（シンポジスト）　私は、江陽中学校の相談指導学級と言って学校に行けなくなったお子さんたちの学級を持っているものです。

すぐそこの場所に学校がありまして、管理社会の中に囲まれたような学校、その中で異質のようなことをやろうと頑張っているものなんです。このとおりの言葉を聞いておわかりかと思うんですが、東北出身なものですから、大変なまっていてお聞き苦しいところがあるかと思いますけれども、ご容赦いただきたいと思います。

きょうのお話の大体の内容は、私の学校で子どもたちと一緒に生活する中で、いろいろ子どもたちにこんなふうに変容してほしいとか、かたい学校教育の中で最低このぐらいのことは子どもたちにしてやりたいとか、そういう思いを込めて、もう既に受け持ってから五年になりますが、私はその前に特殊学級を持っていたときに、二人学校に来れなくていじめられて、そうしたお子さんをあずかった経験があります。そのことも含めて将来、もう二十才になった子までずっと経過をながめた中で、お

話をさせていただきたいと思います。

この相談指導学級をというのは、平塚市の教育委員会で主宰しております、市就学指導委員会というところで審査を受けたものが入ってくるわけでして、私が自分で「おいで」と言うわけにはいかない。そういうものなんです。学校教育の中で対応できる範囲内でも教育の場、そして生活の場、決してうまくいかないんです。学校の中じゃなくて、学校からちょっと離れたところにぼろい木造の校舎がありまして、古い、物置にしていたそうです。でも、子どもたちにとってそこがとっても心の安らぎの場となっていました。

平成五年度に平塚市として、子ども相談教育センターというものを建設中で、現在は別荘がなくなって、指導上やりにくい部面がありますけれども、この方法もまた後でお話しいたしますけれども、また別の方法で子どもたちに別の教育場面をつくっております。

平塚市では五年前に江陽中学校へ開級しました。二学級ありまして、最初は十三人ぐらいなんですが、そのうちどんどんふえてきまして、現在は二十人近くおります。またこの中からもとの学校に戻っていく子たちもいます。そういった変動の激しい学級ですけれど、でも、子どもたちは何かを携えてもとに戻っていく。きらいだから遠ざけるんじゃないんです。子どもたちは自分で見つけた目標をもとに戻っていく気持ちがあります。

教育方針としては、長期欠席のお子さんで、学習意欲の芽生えた子というのが審査の対象なのですが、うちにこもって外に出なくなったお子さんもいます。また、魔訶不思議な理由で学校に来れなくなったというお子さんもいます。

ですから、最近はすごくいろいろな要因が多様化して、私どもにもわからないような理由の子が断然ふえているということなんです。

ここでは、居住地校の、自分の学校へ早く戻るということを促す指導というふうに決めてはいるんですが、うっかりするとこれは誤解されることもあるんです。戻る姿勢が大変影響します。

自主自律的意欲を回復させるというのが教育の大きな方針かと思いますが、これから、これをいろいろ具体化してやっている指導の内容について触れさせていただきます。

指導内容は、個別相談とか、指導とか、そういうものを通して心理的な集団適応の克服とか、意欲を大切にした指導というのが精神ですが、こんな話をすると、絵にかいたもちみたいにきっとなるかもしれませんが、これから具体的に話をしていきます。

不適応を起こしている事柄としては、学校の校舎が怖い。冷たい鉄筋の校舎が怖い。子どもがそう言います。テストはいやだ。かた苦しくて、やっぱり何か自由を束縛されたみたいな気がする。

ちょっと髪の毛を長くすると、すぐ呼びつけられて怒られてしまう。それから集団の中での生活。特に運動会なんかは本当に怖い。あれが一番いやだ。体育もいやだ。教科学習がちょっとおくれるともう「おまえはできないのか」なんて言う先生もなきにしもあらず。

人との交流がどうしてもうまくなっていかない。友だちとのトラブルも起こしやすい。それからいじめにあったとか、こういうことで不登校するようになることが理由のようです。

そういったことを受けて、学校校舎以外の、先ほど申しました、別荘のようなところ、そこに登校するトレーニングから入りました。

学校教育の枠にはめないで、例えば好きな時間に登校する。私服で時計をかけてもいい。髪の毛に変なものをしない限り構わない。そういった割と学校教育の枠を外したような計画にした。

ですから、フリースクールのような感じで、理解のいただけない先生方は、わがままさせているのではないかというような方もあります。

あと不登校の特徴として、先に出ました、友だち関係のトラブルとか、いじめと思われるようなこと、特に長欠による学習のおくれは、中学生にとって進学という問題で子どもにとって大きくのしかかってきます。

思春期というときには、情緒不安な状態になって、そのときには極端にいろいろな要因が絡んで不安な状態になってくる。学校に行きたいけれど行けない。学校教育の管理的な枠にはめて教育指導を考えたのでは生徒の安らぎと意欲を高める指導は仲々うまく行きません。

思春期の子どもというのは、小学校時代のように、親にべったりくっついた時代と違って、本当の自分を客観的に見る年ごろだと思います。自分の姿が周りでどんなふうに映っているのだろうか。友だちは何と思っているのか。そういった仲間の評価をすごく大切にするということは、例えば長電話でおうちの方も困っている方もあると思うんです。一時間でも、一時間半でも何しゃべっているんだかわからないような、長々しゃべっていますけれど、あれだけ友だちというのは本人にとって大切なんです。それから部活に熱中して一生懸命に活動している姿もそのあらわれかと思います。

ですから、学校のアンケート調査を見ますと、一年より二年、二年より三年と、親に依存していることよりも、友だちに依存している、そういったデータも出ておりました。こういった時期が思春期と思います。

それだけに注意を向けてもらえない。そんな孤独感とか、情緒不安とか、これが高じていきますと、心身症となってあらわれます。身体的異常を起こすことで欠席しているのだと自分をなぐさめているんじゃないでしょうか。

子どもたちは家庭でどんな生活をしているかと言いますと、コンピュータゲームに熱中する、音楽を聞くことで、登校できない、そういう負い目とイライラをそんなもので紛らわしているのではない

でしょうか。

よく昼夜逆転という状態になる子もおりますが、夜は登校の心配もなく安らいだ気持ちで自分なりの生活ができるから、という生活リズムが身につき習慣化してしまうのです。

ある子によっては不安から、お母さんにべったりまとわりついて、これ買ってくれたらやってあげるというような、そういう行為や、べたべたへばりついてトイレにまでついてくるというお子さんも出てきます。

そうなってくると、家族の方も多分不安で、お母さん自身が悩んでしまうと思うのです。そこでお母さんの発想の転換です。お母さんは一緒に不安になっていたのでは負けです。お母さんは子どものこともそっとしておきながら、自分は家族の太陽という気持ちでいていただきたい。家族にとって太陽という演出家がいるから家族がうまくいくんじゃないでしょうか。お父さんだって、多分難しい顔で、暗い顔で「お帰りなさい」と言われるよりも、はつらつと元気のいいお母さん。そしてお銚子の一本も「はい、どうぞ」と言ってくれるお母さんの方が幾らか安らぎを感ずるでしょう。

そこを考えると、確かにそういうお母さんは辛いかもしれないけれど、頑張ってひとつ家族の太陽だということの意識を持ってほしいのです。これは親ばっかりじゃないんですね。教師にもよく私は言います。太陽は子どもにとって必要なこと。先生だってそういうことがある。はっきり言います。ぜひそういうふうな、子どもの裏側の見れる先生になってほしい。こんなことを感じることもあります。これは希望的な見解かもしれません。

このような状況に関して、学級の指導内容は、家庭訪問に行って説明をするときに、子どもに、別に会おうとしません。そのときにお母さんといろいろ話し合ってきます。「どうも私のために来ているのに、何で私に会わないでお母さんとばっかり何回も何回も話すんだろう」とだんだんイライラして

きますから、そこらのチャンスをつかまえて、子どもとコミュニケーションをとります。

一緒に遊んだり、ゲームをしたり、遊びや日常の話題、本人の好きな事柄などについて。ニコニコと温かい目で、そして柔らかな言葉で接して行く。指導者として留意したいことだと思います。

子どもにとって学習のおくれを気にしている子ならば、やりたい教科を教えるときもある。ですから、私は本来体育の教師なんですけれども、一応子どもの心の支えになるような対応が欲しいのです。学習内容を伝達するということよりも、子どもにどのように勉強をするものなのかということを教えれば、子どもは意欲に燃えてきますと、黙っていてもひとりでサッサッとやるようになってきます。それがこちらの指導の方法です。

本人にとって、教科書を始めた以上は定期的にお邪魔することにしています。それは一切約束は破らないようにしています。不信感を回復する意味でもやってあげたいものです。

判断ができるようになったお子さんは、別荘に夕方から登校する。ですから、夕方の五時ぐらいから登校してくる子もいます。

そのときの自分で決めた時間とか、自分で何でも考えさせて、それでやっていっても、一たん決めた約束は絶対守ろうと、そういう強制はしません。守るように本人に考えさせます。

同じころに入った子というのは、一生友だちみたいな感覚になって、昔で言う「同期の桜」、そんな感覚だと思うんです。三年生も二年も一年もないです。一緒に入ってきた子はやっぱり何か心の不思議なつながりを持っているんじゃないかと思います。

また、本校の教室に行くにしても、レクリエーションとか、体育とか、仲間と一緒に動くことに参加をうながします。学級の生徒は自分も同じ悩みを持って入ってきたんだという、人の心の裏側が見えるというか、よく優しく支えてくれます。そのようなとき、指導者は直接言わずに生徒同志の働き

かけを大切にしています。

こんな関係で、友人関係でまずくなった子を友人関係で直そうというのが、こちらのねらいなんです。

情緒が安定してきますと、自分なりの考えが持てるようになってきます。友だち同士のけんかが始まります。大変結構な現象だと思って、「おう、やれ、やれ」と言っています。いじめというのは優劣の関係に必ずなりますけれど、けんかというのは同格でないと成立しないと思います。それぞれの言い分を聞いてけんか両成敗。「わかったな」で終わります。

こんなことで子どもたちには接していますが、親御さんにはできれば、次のようにして欲しいとお願いしています。

まず子どもに学校の話を聞かないこと。また学級での生活や行動の面で一々批評を言わない。本人が悩んで、もし話したら、全部チクッて私に教えてくれること。そういったことで、裏で親御さんと話し合うことで、子どもは伸び伸びと自分なりの姿を取り戻していくんじゃないでしょうか。

ですから、教師というのは教師である前に、まずおばあちゃんであり、おじいちゃんであり、お母さんであり、お父さんであり、そういった関係で指導しています。ですから、初めて子どもに会ったとき何と批評するかと言うと、「どこのばあさんだ」と、こう言います。「先生」なんて間違っても言ってくれません。

教師に見られないほうが、不安感、そして緊張感が逆にありませんから。先ほどお話しました、もとの学校へ早期復帰というのがありましたけれども、これは建前であって、子どもにとって本音というのは、やり方が違ってくると思うんです。学校へ戻されるから行かない。あの学級に入ると、成績がつかないから進学できなくなるから行かない。こういった問題も持ち上がってきています。でも、

それは結論を先に考えるからである。この学級での今までの結果を見ていただくと、多分おうちの方も理解していただけるんじゃないでしょうか。

最初こんなふうに打ち明けた親御さんも、今は、「ああ、よかったな。子どもが明るくなりました」と言ってくれるのが私たちへの評価だと思っています。早期発見早期指導、これが最も大事なポイントだと思います。

ですから、保護者の方も抱え込まないで、とにかく相談してほしい。公に聞くのは、やはり世間体というのがあるようで、こっそり相談が私の方は多いんです。それでも結構です。こっそりとが一年間に十件ぐらいあります。母親と話していると、どうしてもやってあげたいという気持ちが逆にいってしまうんです。

担任として言っている言葉に、今の世の中、何でも競争社会で頑張れ、頑張れでやっていますけれども、私どもの子どもは頑張れということは苦痛としか受取れないのです。具体的にどのように行動し、考えて行くのかヒントを与えて不安解消をすこしでも緩和できるようにしないと、自分でこうだという一つのものを獲得できないんです。

ですから、よく言う言葉は、『人間』という漢字はどんなふうに書くの。人と間と書く。数字の点数がいいとか、国語の点数が上がったとか、そんなことよりも、人の中で生活できなければ幸せじゃないと思います。あなたたちの頭の中はまだピーマンです。形は中学生で立派かもしれない。生活経験がまだないんですからと。

さて、ピーマンの中は肉づめにしようか。野菜を詰めようか。それは自分で決める。それはよく話をすることです。

それと出てくるのは、「やるっきゃない」。余り悩むんだったら、行動を起こして失敗もしてみる。

わけがわからなくて突っ走って行ってから、「あれ、何だったっけな」と考えるのがよかろう。

やはり何かをやりながら自分らしいやり方を見つけてほしいんです。だから、きっと子どもたちは自分を一生懸命に取り戻して、何とか自分で進路を考えようというふうになるんだと思います。その問題はまた問題点をいっぱい含んでおりますので、またお話をする機会がありましたらお話しします。

子どもたちにとっては大事な時期だということを、私は常に思っています。不登校を罪悪だとは思わない。自分の生き方を見つけるために回り道をしたり、休養をしているんだと思え。大変乱暴なことかもしれないけれど、子どもにとって回り道をすることは、中学から高校、高校から大学へとストレートにいってみて、一体何のためにそこまでいくのかという意識もない中、自分の将来をしっかり考えた子どもには、苦痛を苦痛と思わなくなります。失敗も心の糧にするようです。

最後になりますけれども、私が前に中学校に勤めたときに教えた子たちが、二十歳になりました。ある日、夏休みに「先生、会食会をやるから来てくれ」、こういうので、二、三人ぐらいかなと思って行ったんです。ところが、卒業生十五人、親御さんが七、八人、ワーッと集まっていたんです。そこで二十歳という一つのめどを通り過ぎて、自分は自分で将来の方向がしっかり固まって、先生に安心して見てもらいたいという姿だったという気がします。私もそのころちょうど六十歳の誕生日でした。だから、「両方ともに親子でけじめがいいじゃないか」とか言いながら会合をやりましたけれども、その会合の中で話していることは、確かに挫折をしたり、自分の進みたい大学のために二、三年浪人した子もいれば、職業に行ったけど、どうも資格が取れないから職がえをしたとか、いろいろな、「苦労はしたよ」と、明るく楽しそうに話してくれたことがあります。

そして最初出会ったときのことなんかも話題に出ました。「だれがこんなばばあに教えてもらうかと逃げ回ったっけね」とか言っていましたけれども、でも、それ以来毎月ずっと顔を見せたり、連絡も

くれます。

こういったことで接してみて、どうしても自分で自分の進路を見つけるためには、いろいろな失敗をしたり、苦労したりすることが大事なんだなとつくづく思っています。

先ほど申し上げたとおり、お母さんの立場は家庭の太陽であってほしいのです。私たち教師も子どもたちの太陽であるべくＰＲに努力していきたいと思います。

以上です。（拍手）

○**菅**　どうもありがとうございました。

なかなかユニークなお話しでして、また後でご質問もあろうかと思いますけれども、一通り三人の方に発言をしていただいた後、ちょっと休憩をとって質問について皆さんに考えていただくというように運んでいきたいと思います。

それでは次は、茅ヶ崎子どもサポートネット相談員の中西さん、よろしくお願いいたします。

○**中西（シンポジスト）**　私の名前は「なかにし」と申します。よろしくお願いをします。（ここまで手話を交えて）

ことしの三月まで子どもの家というところで、見守る人というのをやっていまして、地域の子どもたちと触れ合いをしていました。去年の夏の終わりごろ、九歳のある女の子が「おばさん、手話を習いたいんだ」と言うんです。それでたまたま私も手話に興味を持っていましたので、「じゃ、一緒にやろうか」ということになりました。子どもの家に遊びに来ている子に声をかけて、「やりたい人一緒にやろう」ということで、週に一回、夕方ちょっとずつ続けて参りました。先生はなしです。いろんな資料を寄せ集めて、指文字から始めて、すごく楽しく続いて、もう一年になるんです。それで最近は指文字だけではなく

て、体を使ってや、単語を学びながら話をつくったり、歌を歌ったりしています。

一人の子の呟き、思いつきがそういう形に発展したのがすごくうれしくて、本当に楽しんでおります。

きょうは、テーマが「子どもたちの明日へのメッセージ」ということですが、最初に申し上げたいなと思います。

明日へのメッセージを言うのではなくて、しっかり聞きたいな。子どもたちの大人へのメッセージを聞きたいな。そこから出発したいなということです。

うらめしそうな目、不服そうな口もと、不従順であったり、あるいは痛みであったり、病気になったり、それから暴言をはいたり、暴れたり、いろいろな型で子どもたちは大人に訴えていると思うんです。それを私たちがどれだけ受けとめられるのかなというところから出発をしなければならないと思います。

私が子どもを通して学校とかかわったのは長男が小学校に入ったときからでございます。たまたま目黒に住んでいまして、国立教育研究所のすぐ隣に学校があったんです。お隣のよしみでＰＴＡの学習会に国立教育研究所の水道方式の有名な先生がいるというので来てくださって、数学はこうやって教えるとよくわかるんですよというお話をしてくださったんです。私もそういうのを初めて聞きまして、「よくわかるわ」と。私は数学が大っきらいなんですね。それでも何かそれだとわかるみたいで感激したんです。

ところが、実際に子どもたちの授業は、三人の子どもがおりますが、水道方式で教えていただいたことは一回もなかったみたいです。子どもたちが皆数学ができなかったのは遺伝もありますから仕方がないのですが、そのとき非常に感じたのは、国立研究所でせっかく研究されていることを、何か現

場の先生方はあまりやっていないのかなという感想を持っていたんです。

きょうはさっきのご説明にもありましたように、行政の研究所ではない、先生方の熱意でもって支えられている教育文化研究所の主催だということを知りました。

去年の報告集を読ませていただいて、すごくいいことをいっぱい挙げてくださっているなと感心したんですね。

それで、昔のことを思い出して、この報告集は一般の先生方はみんな読んでくださっているのかな。先ほどもご説明がありましたけれども、文部省からの〝登校拒否はどの子にも起こりうる〟と見解が出されていますが、それをどんなふうに一般の大人も含めて先生方が受けとめているのかしらということを憂えています。

去年の報告集の中から、私が勝手に気に入ったところを六つばかり拾い出してまいりましたので、それを言わせていただきたいと思います。

まず、子どもの生活から学校の占める比重を軽くする。

二つ目、集団とは個の集合である。

三つ目、教育とは自ら育つことである。

四つ目、見えないものを大切にしよう。

五つ目、体験、いろいろな出会いや交流をふやそう。

六つ目、安心できる時間のプレゼントをしよう。

この六つを去年の報告集から拾わせていただきました。

この中で私は一番ポイントになるのは、一番最初の、子どもの生活から学校の占める比重を軽くしようというところだと思っています。

ほかの二から六の部分は、それを支える意識改革の部分ではないかと考えます。学校の占める比重を軽くしようということで、五日制が導入されつつありますがもっと縮めて半分にしよう、学校は半日にしておしまい、というふうに、たとえしたとしても、子ども観であるとか、教育観であるとか、こういう部分が変革しなければ一つもその先、子どもの生活空間は広がらないのではないでしょうか。

今、六つ拾い上げましたけれども、これ等は宝石みたいな言葉です。それを一体どういうふうにしたら本当に子どもの胸にかけてやれるんだろうということが私たちの課題であると思います。

私は茅ヶ崎子どもサポートネット相談員として今日は参加させていただいています。

サポートの活動は、その「ペンダント」をどうしたら子どもの胸に掛けてやることができるかを、具体的に実践し、試行錯誤している団体です。そこの部分をちょっと説明させていただきたいと思います。

茅ヶ崎の中で、もう二十年ぐらい前から子どもにかかわるいろいろな活動がなされています。地域文庫や公民館活動、子どもたちのふれ合いを通して生まれた学習会であるとか、ＰＴＡの中の学習会がそのまま定着した教育学習会だとか、高校教育を考える会だとか、いろいろな会があります。それから学童保育を考える会もあります。

そういう子どもにかかわる人々をつなぎ合わせて、子どもをとりまく環境整備をし、自分らしく生きられるよう支援することを提唱し賛同者を募集いたしました。今、結成して三年目に入ったところです。

具体的にどういうことをしているかと言いますと、先ず相談を受け付けております。それは不登校の問題だけじゃなくて、あらゆる子どもにかかわる問題を扱っています。そしてその個の問題をどれだけ全体の問題として取り上げてくことができるか。広がりを持った活動につなげていこうとしてい

ます。

それから毎月ニュースを発行しています。これは私たちの活動の基本としている、「子どもの権利条約の意義」を日常の生活に浸透させて行くことを主眼としています。そして子どもたちの権利を保障していくのはまず親である。そこの認識の上に成り立っています。

もう一つは居場所づくり。それも不登校の子どもたちのためということではなく、すべての子どもたちのために進めています。現在は地域の公民館とか、子どもの家とか、そういう施設を大人が借りて、そこを自由に子どもに使ってもらおうというスタイルをとっています。これは学校の空き教室の有効利用や、いろんな形で広まっていく部分じゃないかと考えております。

私たちの活動の基本の子どもの権利を守るのは、まず親であるということの考え方、これが戦後五十年日本の民主教育を進めてきた中で、一番欠落してしまっている部分ではないかと思います。

どう欠落しているかというと、システムとしてないと言えると思うんです。教育は授かるものではないということは、私たち分かっているんですが、それではどうやってそれを自分たちのものに引きつけられるかというところで、どうしていいかわからない。それは、教師は教育権を持っている、父母は父母として意見を持っている。それをお互いに協議していくシステムがないということなんです。気がついてみましたら、日本以外の先進国ではほとんどのところでそういうシステムを持っているんですね。

私は「父母の教育権とＰＴＡ研究会」に所属して、日本のＰＴＡの活動と父母が持つ教育に対する意見を表明できる可能性について追求しているんですが、そこでいろいろな資料を見ますと、本当に恥ずかしくなるぐらい日本はそういう意識が育っていないということを感じます。それは与えられるものではなくて、私たちが獲得していかなければならないものだと思います。

学校の占める部分、比重を子どもの中から少なくしていくということは、社会全体にそういう認識がなければならないと思います。子ども自身が生み出していく生活の部分を少しづつでも増やして行くことです。

時間があればご紹介したいんですけれども、例えば一番新しい資料に、オーストラリアのシドニー近郊の報告があります。オーストラリアは割に日本に似ていて、二、三年前まで親の意識が今の私たちと同じように学校の言うことは絶対。学校に適応させていく。そういう親の考えが一般的だったんですけれども、なぜか、その「なぜか」というところはまだ調べがうまくついないんですけれども、おそらく「子どもの権利条約」が国連で採決されて、それに対する反応が急ピッチで高まり意識の改革がなされて来ているのではないかと想像できます。

この学校では、学校の政策決定及び運営のために学校評議会や、父母と市民の組織などを設置して、父母（市民を含む）生徒の意見を充分に取り入れるようになっています。教育内容から財政、学校施設

と環境、教職員の福利に至るまで協議し、報告しています。

オーストラリアに限らず、欧米諸国の制度は中学生以上の生徒をその会議に出席させています。そして国によっては高校以上は父母が介入しないという傾向をみせています。

日本は地域社会においても、まだまだ非民主的な状況が温存されています。一人一人が責任を持って意見を言い協議していくことで、教師も楽になり、子どもにもゆとりが生まれるでしょう。以上です。（拍手）

○**菅**　もしよろしければ、また後で。

○**中西**　そうですね。そうさせていただきます。

○**菅**　それでは最後になりますけれども、小児精神科の竹内先生から。

○**竹内（シンポジスト）**　中西先生のお話と少しずれますが、前回の不登校(1)のシンポジウムで不登校に対する考え方の話を申し上げましたので、今回は不登校からどのように回復していったのかといったところに焦点をあてて考えたいと思います。

実際に病院で出会った二人の子どもの話をさせて頂きます。

数年前のことでした。以前受け持った患者である、二十歳を少し越えた青年から私に電話がかかってきました。彼と初めて病院で出会ったのは中学校の頃でした。身体へのこだわりが強く、そのために学校は長期欠席の状態でした。その頃のこだわりは大変重症で、清潔、不潔はもちろん、物の置き方まで及んでいました。母子家庭で独りっ子でしたが、不登校のときは母親にしがみついて暴力をふるったりした子どもでした。そのために入院をしたものの独りで過ごす不安にたえきれずに、病院をこっそり逃げだしてしまいました。自宅へ向かう途中の電車の駅では線路に飛び

込もうと思ったほど追いつめられていました。このように主治医とのはっきりとした別れの無い退院でした。その後は主治医の入院治療に対しての不信感が子どもも親も根強く音信が途絶えていました。

それから数年が経ちました。その子どもの中学卒業後に、地域の保健所から問い合わせがあり、また前後して親戚の方から連絡を受けました。母親と子どもが自宅にひきこもって、親戚が食事を差入れにいっても受け取らない、そのうちに餓死してしまうのではないかと案じたものでした。母親は親戚が財産をねらっていると思い詰めていたようでしたし、子どもは近所に聞こえるくらいの激しい罵倒を母親にあびせていたようでした。二回位警察に通報があって関与する形で精神病院に強制的な入院をしました。母親も同時に別の病棟に入院になりました。

そのような彼がなつかしがって私に会いたいという電話でした。私の方は複雑な気持ちでした。その電話によると、関東地方を管轄する幹部になっていると言うのです。出世をしたものです。その会社は皆さんもすぐにお判りになる会社ですから「本当かな、精神分裂病にありがちな誇大妄想かも知れない」とも疑ったわけです。

その彼とあった夜のことは今でもよく覚えています。夜の病院というのは非常にうす暗くて嫌なところです。その暗い廊下を彼とおぼしき人影が近づいて来ました。出迎えた私は、電話の話から背広姿の立派になった青年を想像して待ち構えていました。しかし現れた青年の格好に驚きました。くたびれたジャンパーを着て木綿のバッグを両手にぶらさげていました。フリーターの格好です。「やっぱり」という感じでした。（笑い）明るい喫茶室で挨拶をかわすと、少年の頃の面影も残っていましたが、一方では病気からくる硬い表情をしていました。「やっぱり病気で以前の管理職の話は嘘だったのか」妙に独りでこころの中で納得していました。そのために話の最初の方は「この子はあれからどのように過ごしていたのか」と医者の眼で接していました。

しかし青年の語り口にそのうちに魅せられて、あるいはその内容に圧倒されてあっというまの二時間が過ぎてしまいました。今日はそのときの話をかいつまんで話をさせて頂きます。感情を押し殺すかのような口調で彼は問われるままに淡々と語りました。

「恥ずかしい話ですけれど住んでいた町では暮らせないほど、暴れたりおかしなことを叫んだりして迷惑をかけました。結局警察にもやっかいになりました。病気ではない、そのことばかりに力みました。母親を恨みもしました」「今のように退院できたきっかけは二回目の入院のときでした。同じ病気の先輩に『十代なのにこんなところになぜ入院しているんだ。たった一人のお母さんをなぜなぐっちゃうんだ。今ならやり直せるぞ。俺の年になったらおしまいだ。おまえだったら社会に出られる。頑張れる』そう言われたときに初めて自分自身頑張ろうと思ったんです」

字面からではありふれたよく使われる言葉にすぎない言葉も、この子どもにとっては生き方を変えたきっかけになったと言うのです。その患者さんの言葉はよっぽどのものであったと思われます。同じ言葉であっても、受けとめかたはさまざまで、状況やタイミング、話し手の人柄、聞き手の状態等のいろいろな要素で、言葉は力や意味を持ったり持たなかったりするものだとつくづく思いました。彼に話した話の内容を、病気の先輩であるこの患者さんはきっと覚えてはいないと思います。カウンセリングも難しい技術の集合ではなく、このような意図や企みをこえた「出会い」に似ているといえます。

その患者さんと話をしたときに「社会に出たい。一度で良いから誰か人の役に立ちたい。そのためには病院がいやなのではなく社会に出るために退院したい」初めてそう考えたと言います。彼がバイトで勤めていたところは外食関係の店でした。中卒ですから、しかも中学校もほとんど通っていなかった子どもですから当初は誰からもあまり認められなかったそうです。しかし好運は訪れました。あ

るとき食事を出したお客さんが帰りがけに「うまかった。ご馳走さま」と言ってくれました。そのときに涙がでるくらい嬉しかったと言います。その言葉が嬉しくて嬉しくてたまらなかったと言います。

私はその話を聞いて目の前の青年の存在に圧倒され始めました。「ご馳走さま」の患者の言葉に彼のように胸がふるえるようなことがあったのかな、と自問もしました。医者として患者にあい、役に立ったとき、あるいは感謝されたときにこのような謙虚さがあったのかと反省もさせられました。

その後も彼の人の役にたちたいという願いは一つずつ実を結んでいきます。ゴールデンウイークや夏休みのような時期は普通の学生のバイトにとっては勤めたくない、むしろ遊びに行きたがって店が手薄になります。そのときにこの青年は頼まれるままに、従業員の少ない店に泊り込んで一生懸命に喜んで働いたそうです。そのときから店の人たちにも彼は信頼を置かれ始めたようだと言いました。

彼の名刺に書かれた字は非常に稚拙でした。今は出世し仕事の中身も変わり客と接することよりは営業関係の責任者になったわけで、数字を扱う難しさが要求される立場になりました。

「失礼だけれどこんな字を書いているけれども、どうやって予算の配分をするのか」と本当に失礼なことを尋ねたところ彼はあくまでも淡々と謙虚に応えてくれました。「営業のマニュアルを何度も読みなおしました。勉強をしていなかったので店から帰るときも、いつでもどこでも繰り返し繰り返し読みました。そうすれば誰にも判るようにこのマニュアルは説明されていますから誰もができるのです」

誰もが出来ることをやっているにすぎないと言うのですが、俗人の自信過剰のようなイヤミが語り口からは聞こえません。それで私はまた圧倒されてしまうのでした。

あまり過去のことで圧倒されましたので、最初の話題に戻しました。「仕事帰りと言っていましたが、今日はどのような仕事をしたのか」と尋ねると「この病院の近くの支店でトラブルがありましてそこに行ってきました」。そのトラブルとはアルバイトの学生が給仕をしたときに暴力団の人の上着を

汚してしまったことでした。そのときの詫びの帰り道でした。「何も本社から出向く仕事ではなかったけれども、人がいやがることだから自分が出かけたのです。それくらいが自分のできることだとも思っています」と言いました。「詫びは簡単です。そのようなときの換金の券がありましてそれを持って行きひたすら盛心誠意詫びればいいのです。それだけです」先ほどまでの病気特有の表情の動きの乏しさも、その時は迫力と言いましょうか、単調な言い回しにある種の迫力を感じ始めてもいました。会社幹部といってもフリーターと見間違えられる身なりの青年のこの表情に、暴力団も詫びを受け入れたのではないかと内心思いました。「ただそのトラブルよりもアルバイトの学生をかばえなかった支店長に対しては減給の処置をとってきました。アルバイトの学生には一切注意は言いませんでした」私が言えばキザに聞こえると思いますが、後半の話は経営哲学のように受け取れます。そのようなことをハタチそこそこで言うのですから驚きました。そこで私は少し皮肉っぽく「マニュアルにそのようなことも書いてあるのでしょうか」と尋ねると「いいえ、私自身の経験によりました」と応えました。「それではきっとあなたは良い先輩に恵まれたのでしょうか」すると彼はキッパリと答えました。「いいえ違います。絶対にあのようにはなりたくないという上司はいっぱいいました。そのような人の態度をよく覚えました。立場が変わると知らず知らずのうちに自分でもやってしまうことはよくありますから」ここでも私は甲を脱ぎました。

もう一つ感動する話がありました。母親は入院が未だ続いていました。母親についても彼なりの言葉がありました。「自分は母親に自分自身で立ち上がって欲しいと思っています。気の毒だけれどそれしかない。病気をしっかりとらえて欲しい。自分も外来の薬を忘れたことはない。自分はこの二粒の薬を大事にしています。これがあると本当に安心もします。だから母親も他人のせいにするのではなく真剣に病気を考えてもらいたい。そのためにも今の勤め先を面会の際にも母親には言っていません。

もし伝えれば母親は自分を頼ってしまうでしょう。そうすれば二人が入院する前のときの繰り返しになってしまう」と自分に言い聞かせるように言いました。このときだけは心持ちですが少し語気を強く感じました。

「親離れ」「子離れ」とはしばしば耳にする言葉ですが、彼の話をそのような言葉で安易にくくることには抵抗を覚えます。二十歳そこそこですが、どん底のようなすさまじい生き方をした青年の言葉ゆえに、ある種の重みを感じました。彼との再会は、苦しい中を生き抜いた人のみが体で覚えた言葉の流れに圧倒された二時間でした。

不登校の子どもの一部にはこのように精神の病気の人もいます。不登校の子どもの一群に精神病を認めないことは差別のようにも思います。しかし病気とは悪い面だけではないのです。病人や不登校の子どもを必要以上に持ち上げることは気が引けますが、普通の生き方ではつい見落としてしまう大切なものを苦しい思いをしたからこそ見ることができる、あるいは気づくものがあると痛感しました。

次にお話をするのは癌で死んでしまった子どもの話です。

不登校を語るときに学校に出席できるようになったか否かを大人は強調しすぎるように思われます。それは目に映り易い結果にすぎません。先ほどのような精神病を背景とした不登校の子どもを、不登校の例外として考えてほしくないのです。教育の視点は障害の名称にこだわらないものと思います。

人生から考えると学校に通う時期は短いものです。学籍のある時期をそのときだけではなく、その後の生涯にわたる長い時期の助走路、あるいは礎えとして、長い目で考えていただきたいと思います。登校が再開できなかったときに、関わりは失敗したと皮相的に結論づける考え方には首をかしげます。そのことよりも学校には来れない子どもに教育として何が援助できたのか否かという方が大切です。対応の困難な不登校の子どもに遭遇したときに、これから述べる「死を前にした子ども」の教育の実

践をかいまみて考えたことを私はいつも思いだし自戒するのです。

その子どもは中学校の女生徒でした。軽い足の痛みで検査をしたところ不幸にも、膝下に悪性の癌ができていました。早期に発見されましたので、健康であった膝から上も思い切って切断しました。どこも悪くない部位の広範囲に及ぶ切除を説得され少女は素直に聞き入れました。片足を全部、その付け根から切断する手術は少女にとっては深刻だったことでしょう。その危機を明るく乗り越えて安泰かと思われました。不運なことに癌の転移は目に見えないくらいに速く、全身に転移していたのでした。死期が確実にせまってきました。全身の衰弱もあり治療も保存療法に変わりました。その頃病院内にある養護学校の修学旅行がありました。数カ月後には命が終わってしまう日々を前にして、子どもも親も担任も最後になるかもしれない旅行への参加の是非が議論されました。レントゲンの肺の写真は全体が白い影で覆われ転移を示唆し、それに伴う呼吸の障害のため顔色は土気色で唇は青紫と、いかにも重症な病人の顔つきに変わっていました。

病院の修学旅行ですから近隣の静岡県への一泊の旅でした。その旅行の一つの目的は「苺がり」でした。苺の石垣はなだらかな山の傾斜を利用して作られていました。そのためにバスで降りた所からその苺のハウスまでは歩いて登らないといけません。その日は生憎激しい雨足が通過した直後でしたから、石垣へ通じる小道は川のようにぬかるんで松葉杖では滑って登れません。松葉杖には急勾配の小道を前にして彼女は独り躊躇していました。一緒に参加した、生まれたときから足の不自由な子どもたちは先生たちに「おぶって、背負って」とか我先に口にしてハウスに一目散です。数カ月前までは元気にこの程度の坂を登り降りしていた少女には言いづらかったのでしょうし、松葉杖で何とか登りたかったのかもしれません。しかし雨降りの直後ですから滑って大変危険でした。私は彼女に背中におぶさるように指示しました。おそるおそる、そして申し訳なさそうに身体を硬くしながら異性で

ある私の背中に少女は柔らかな体を近づけてきました。しっかり背負おうとして両手を後ろに回したときに制服の影に隠れた片足が失われたことを強く認識しました。おぶさることに慣れきった印象の肢体不自由の子どもを背負ったときと背中の感触が大変違いました。ハウスの中に運びこんでも少女はなかなか苺を口にしません。食欲がおちていたのか、疲れもあったのか石垣の前でじっとしていました。深紅のルビーの宝石のような立派な苺を担任が一個摘みとってきました。うす紫色に変色した唇に輝くような赤い苺との対比が鮮烈でした。「おいしい、とてもおいしい、来て良かった」誰にでもなくささやくように語ったか弱い精一杯の言葉でしたが今も私の耳元に残ります。食べた苺の一個分にあたるのでしょうか、苺の赤い色の血の気を取り戻したかのように一瞬ですが柔かみが戻ったように思いました。この「苺がり」の経験は生徒にとっても、教員や医者である私にとっても貴重なものでした。大柄な少女を背負ったときに本当に涙がこぼれました。「足はすでになくなっている」後ろに手を回したときにそのことを強く実感したのでした。そして委ねることに躊躇している少女の心が背中をとおして感じ取れましたし、それから数カ月であろう生命のはかなさも体の意外な軽さに知りました。最後に近い日々のわずかな時間ではあったけれども一緒に過ごすことができたことで多くの事柄をこの少女から私は学びました。

この子どもは死の寸前までベッドの側で教育を受けました。このような時期に教師は何ができるのかと以前は議論がありました。そして次のような結論に達しました。主治医の許可がある限り教師は教師らしく対応しようと。英語の担当は「明日死んでしまうことが決まっていても、リンゴの苗を植えよう」という内容のリーダーを教材にベッドの傍らで個人授業をしました。明日死ぬことが決まっていてもアルファベットを学ぶことはその子どもにとっては生きる意味をもっていると判断したのです。その後少女は闘病の甲斐なく亡くなってしまいました。しかし命の灯火が消えかかる頃にその英

語の先生に、胸をうつ手紙を書いてプレゼントしたのでした。詩の形で書かれた手紙は残された私たちを思いやった優しいメッセージでした。

このわずか数カ月の間にやりとりされた「癌の子ども」の教育の試行錯誤は「不登校」の教育を考える際にも礎えになると思いました。不登校の子どもに対しても学校へは来れませんでした、という通学のみの尺度の結果論で教育を考えるのではないということです。むしろ関わりあう経過が大切です。一人一人の子どもたちにとってその時その時の「輝ける時間」を大人たちがプレゼントできるかどうかということが大切であることを痛感しました。社会から引きこもった不登校の子どもたちを考えると、学校に全ての子どもを戻すための援助という視点ではなく、その辛い日々の中にも教師としての援助は何ができるのであろうかといった視点を取り戻すことだと思いました。

今までにあげた事例の二人が過ごした日々の過程を再び考えてみます。最初の子どもは通常の学校ではなく、一緒に入院した患者さんによって、あるいはバイトの職場で回復し社会の中に居場所を見いだしました。二番目の子どもは死がせまる辛い日々を、安らぎの時間を見いだすべく努力し残された時間の質を変化させました。その一助に闘病生活の傍ら付き添った教師の貢献がありました。どのように重い障害であれ、生きている限りは支えたり支えられたりの連続と言えるのです。

次に私の話のまとめとして、子どもたちが「辛い時間」に直面した場合に大人たちができる援助のいくつかを述べたいと思います。

第一に「辛い時間」の援助として申し上げたいことは、安心できる場所や他人の存在が不可欠であるということです。辛いときに、自分だけがと被害的に考えたり、あるいは自分だけ独りぼっちというように思い込むと、辛さが一層辛く感じられます。先の中西先生の話の居場所という言葉につながる問題かもしれません。居場所は健康な子どもたちにとっては、団地の片隅でも、あるいはたむろす

るコンビニの店の前でもどこにでもありそうですが、辛いときにはこれが意外に見つかりにくいものです。そして自分独りしか自分の辛さは判らないと思い込みがちにもなります。そのためにも仲間からはずれてしまった子どもたちにとっては、真面目に相手をしてくれる大人の存在が必要になります。相手がいて初めて自分の心持ちを言葉に素直に現せることができて、独りぼっちの思い込みから解放される機会が生じるのです。

第二に辛い時間に対して時間を忘れて夢中で過ごせるような時間の過ごし方の工夫です。辛さを真正面から克服しようと努力してもこえられない辛さもあるのです。そういうときは夢中に過ごせる仲間や、馴れ親しんだおもちゃやぬいぐるみ等、何か時間を忘れさせる術を心得ている場合は幸いです。特に不登校の状態から抜け出せないといった場合には重要です。解決のあては見いだせなくても、そしてそのことを考えてしまうと怖いし焦るしいらいらもするけれど、大好きな先生と勉強をしたら忘れてしまった、「面白かった」という感慨ですね。それが何かに役に立つということではなく、明日に対しては意味をもたない時間の過ごし方を工夫する術もとても大切です。しかもただ「面白かった」と自分独りで喜ぶのではなく、誰かに役に立って時間が過ごせたときはこころも大きくなります。誰かに伝えるべきメッセージがある子どもは幸せです。子ども自身が「自分は死んでしまうかもしれないけれど、先生ありがとう」こころの中でつぶやける子どもですね。独りぼっちで死ぬのではなく、社会にこころでつながることのできる子どもは有限の時間が変えられて広がります。言い換えると安心できる人との広がりを考えていくことも教育の一つの課題と思います。学校からは離れていても、子どものこころの中に教師のイメージができた場合には辛いときにぶつかってもこころの中で対話して切り抜けることができるのです。

第三に辛い時間の軽減です。癌の末期に対してホスピスという施設があります。治療による苦痛よ

りは痛みを軽減し残された時間を生き生きと生きようとする治療の考え方ガホスピスです。こころの痛みに対しては精神科の薬は効力があります。こころを支える基礎的な体力にとても有効です。不安になっていらいらする、いらいらで眠れない、眠れないから辛くなる、このような悪循環の日々には非常に有効です。私自身もときにはこの薬を飲みます。そうすると多くの人は怪訝な顔をします。「精神科医のくせに薬を飲むんですか」薬をのむのは精神病という偏見、誤解こそが有害です。精神科の薬に対しての偏見がそこには感じ取れます。内科医が風邪にかかって薬を飲むのと一緒です。精神科医がこころが疲れてもいっこうにおかしくはないのですが、皆さんもおかしがりますね。（笑い）

次に四番目ですが、辛いときには自分の置かれている状況の中で「できていることと、できそうなことと、絶対にできないこと」この三者をきっちりと見極めたいと思います。辛いときは「できなくなったこと」をつい数えがちになります。その時点で「できていること」は蚊帳の外といった具合いで目に入りません。またそのときに「できそうもないこと」に対して「どのようにしたらよいか」と対応を考えて当事者の子どもも大人も焦ることが、しばしば陥る不安のからくりです。この際にも二番目の癌の女生徒の話が参考になります。死ぬことを止めることは今の医療ではできません。しかしそれまでの時間の質をかえることは教育や人との出会いはできるのです。違う例をあげます。口べたな子どもを訓練して落語家のような人に変身させるのは教育の本来の姿ではないと思います。口での表現が下手な子どもは下手なりにハッピーな生き方を捜し工夫していくことが大切だと思います。短所や「できないこと」を「変える」ことより、それを「生かす」といった視点です。そのような意味で子どもには大人のコーチ役が必要といえます。

何かのはずみで学校へ行けたり行けなかったりの日々を過ごす子どもに対して「今のあなたのこころの体力からすると無理をしなくても良いのだよ。今できていることをしっかりと明日も頑張ろう。

そうすれば必ずあなたはあなたの国のオリンピックの代表選手になれるんだよ」このような意味でのコーチ役ですね。支えがないと「こんなことばかりして俺は大丈夫かな。落ちこぼれちゃって駄目だろうな」と弱気にかられるのが子どもの常でもあります。子どもは視野が狭いし、経験も大人と比較するときわめて少ない。それで将来を暗く考えてしまう子どもも多いわけです。一番目にあげた子どもの例も渦中の当事者の子どもにはきっと例外中の例外としか思えないでしょう。しかし世の中にこのようなことは実際は多いのです。

最後になりましたが阿部先生の話にクレイムをつける気持ちはありませんが少し意見を言いたいと思います。先生は「母親は家族の太陽である。教員は学校の中の太陽であるべきだ」と言われましたが、隣の私には大変危ぐを感じる発想に思えました。皆さんから見ても一目瞭然でしょうが、太陽のような阿部先生と私とを比べてください。体操の先生と顔色の悪い精神科の患者の代表のように思われるでしょう（笑い）。私の診療は患者さんの「太陽になる」よりも、むしろ患者さんやご家族に同情されながら生きている医者ですから（笑い）、内心は「太陽になりたい、明日こそ太陽になるぞ」と願ってもいるのですが、この年齢までどうしても太陽にはなれない人間もこのようにいるわけですね。「なるべきだ」と言われても成れないのです。

しかしこころの疲れた人は似たもの同士を捜すこともあるのですから、無理して皆が太陽になる必要はないように思います。むしろ太陽になろうと無理なあがきを試みるよりは、自分にとっての自分らしい健康さを把握しておくということが、本当に大切であると思います。また皆が太陽になるようなマニュアルを読むよりは「太陽になれない」自分を素直に認める余裕が重要です。一期一会ではありませんが教科書に安易に頼らずに、そこには書かれていないところで、大人は大人としての「明日に向かって」の精一杯生きようとする姿勢が子どもへのプレゼントになろうかと思います。子どもは

そのような大人の後ろ姿をみて、自分の人生のトラブルや障害を乗り越えようとするエネルギーを貰うのです。そのような大人から子どもなりのメッセージを感じ取って生きのびるのではないかと思います。

以上で私の話を終わります。（拍手）

○菅　どうもありがとうございました。

一時間以上たちましたので、ここで休憩をいたします。その間に質問や御意見について考えておいて下さい。後半は皆さんの質問に答えていただいたり、あるいはお互いに議論をしあったりというふうに、少しダイナミックな会にしていきたいと思います。よろしくご協力をお願いします。

それでは四十五分にここに帰ってきていただきたいと思います。

―――　休　憩　―――

質疑応答

○菅　ではシンポジウムの後半に入ります。フロアからどうぞ遠慮なく質問をしていただきたいと思います。どなたかございませんか。最初、だれかに口火を切っていただくと、割とうまくいくものですから。

○――　私は小学校で教員をやっております。

一昨年度と昨年度と三名ほど不登校の子を受け持ちました。きょう、パネラーの先生方のお話を聞

いて、不登校の子のすばらしさみたいなところをよくみてあげようという気持ちがすごく伝わってきましたし、私自身も不登校の子とかかわったということで、教師としていろいろと突き当たったことがたくさんあるわけです。

先ほど阿部先生からも出ましたけれども、不登校の子は友だちによって変わってくるという感覚でやっていけばいいんですが、学校のできることはどんなことだろうとすぐに考えてしまうんですね。

そこで先ほどの竹内先生の話にかかわることですが、学校側としてはどの程度のところまで対応していけるか。実際私が受け持った子の場合には、子どもどうしの助け合いの気持ちをもたせるようにした結果、二年ほどは不登校にならなかったんです。つまりすぐ民間施設とか、児童学級とかにお任せする前に学校としてできることがあるのではないかと思うんです。その辺をどうやっていくか。また家庭でできることはどんなことか。

もう一つは、実際に民間施設とか、児童学級にお任せするときに、留意すべきことはどんなことかを

具体的に教えていただければ参考になると思いますので、よろしくお願いします。

○**菅**　今の発言に関連して何かご質問はないでしょうか。一緒にパネラーの先生方にお答え願ったらと思います。何かありませんか。

○――　小学校の教諭です。

今のことと若干関係があると思いますので、お伺いしたいんです。

物の本によりますと、これだけ登校拒否がふえている国は日本だけだと聞いているんですね。おそらく日本独特の理由があると思うんです。たとえば社会とか、家庭とか、学校とかに分けることができると思うんですけれども、その主な原因を簡単でいいですから、説明していただきたいと思います。

○**菅**　今のは少しニュアンスが違うかと思うんですけれども、先ほどのご質問の方からいきましょうか。

何か学校ができることがあるんじゃないか。どういうことが可能なのかということについてどなたか。

○**阿部**　私の学級の場合は、先ほど要因ということで、詳しくは申し上げませんでしたけれども、やはり一緒に生活したり、最初のきっかけはみんないじめとか、友だちとのトラブルとか、こういうふうな原因で来ます。こういった問題に関しては、学校で対応はできるんじゃないでしょうか。

ところが、取り去ってしまったものを学校で何とか対応することは、ちょっと難しいということですね。例えば精神的に神経症的な症状を起こしたお子さんを幾ら学校で対応しようとしても、これはちょっと、私どもの扱っている子どもたちの様子から見て無理じゃないのかな。

それよりも、相談を受ける方法を講じた方が何かいい方法が見つかるのではないかなと思います。

それから次に要因なんですけれども、先ほどお話をしましたように、いじめや友だちのトラブルと

いったものが約八〇％です。私の目の前を通り過ぎていったお子さんはもう九十人います。その九十人のパーセントを見ていくと、約八〇％ぐらいが学校に起因すると思われます。でも、私たちが指導しながら観察をしますと、子どもにどこかにひっかかっているものがあって、なかなか仲間に入れないというものがあるような気がいたします。学校でも指導の面でもうちょっと工夫する必要があるなと思うことがあります。

○**中西**　一つずつ言うよりも、子どものとらえ方というようなところでお話したいなと思うんです。

学校に来られなくなった子どもがクラスに出た場合、先生がクラス全体の問題としてどんなふうにそれを把握するのかなというところが非常に気になるんです。

その子が来なくなって、一週間経つとしますね。するとその子の椅子はいつも空席です。でもその誰もすわっていない椅子の存在というか、それがどんなふうにみんなの意識の中に育まれているかな。そういうクラス運営とか、その辺を私は非常に気にしています。

子どもは学校に来なくなったことは、逆に言えば、先生たちに言葉の無いメッセージを発しているのですから。そしてそれはそれぞれの子によって全く異なる状況があると思うんですね。ですから場合によっては担任の先生が対応するのはきらわれるかも知れないし、それは道は一つじゃない。だから、その子のあり様をそのまま認める方がその子にとって楽かもしれません。

しかし、たとえ学校へ来ていなくてもクラスの中の一人という感じで、意識があるわけですから、いつもクラスの学校の先生がその子がそこにいるのだということを、みんなで確認していくというのか、そういう作業が大切だと思います。

それは常日ごろ学校に行っている、いないにかかわらず、一人一人がそういうふうな気持ちを持って学校に所属しているかなということだと思います。

○**菅**　民間機関をどう評価し判断するかというようなことで、一つの質問がありましたけれども、もし答えられるようだったらあわせて。

○**竹内**　以前もこの会でお話をしましたが、医者も教員も基本的にはサービス業であり、人と接して援助をする職種であります。不登校の対応で最も大切なことは、『私たちが何をするのか』ではなく、今目の前にいる子どもや家族が、学校や担任に『何を希望されている』のか、『何に困っているのか』そこに耳を傾けて欲しいと思います。目の前の子どもは『この私に何を期待しているのか』そうしますと単に一般的な教師という枠では何も語れません。教師といっても様々です。学校での地位、年齢、性別、人格、人気いろいろな要素で、この人は信頼が置けるのかどうかと、相談の前に「値踏み」されているわけです。

ですから危機の時に学校に頼ってくれない、相談に来てくれないとこぼしても、その前の段階が常に問われています。平素の事が問題です。学校に来ている子どもたちに教師としてどのように接してきたか。街に出れば噂はいろいろです。「あそこの学校は…」「あの先生は…」ぜひご自分の勤める地域の噂を自分のパワーに組み入れて欲しいのです。それを中傷、誤解だと否定するのではなく、自分に不利で不都合な情報ほど謙虚に受け止めていただく姿勢が大切です。自分では見ることができない後ろ姿を知るきっかけになるかもしれない。いたずらにそのことで被害的に過度に萎縮してはいけませんが、日々そのような情報を大切にしておくことは、トラブルや危機には役に立ちます。普通は悪い情報は入りにくいものです。コミュニケーションは悪い情報があって始めて成り立つものです。

そのような意味でサービス業でありたいと思います。例えば不登校の親に「何を学校に望んでいるのか」と尋ねますと、ある親は「友人が欲しい」、ある親は「同じクラスの子どもは来て欲しくない」いろいろ言うかもしれません。そのときに単純に親の希望に右から左に対応するのが教員ではないと

思います。媚びては不自然です。

そこでの判断が重要です。自分のクラスの中で「この問題はどういうふうに考えているのか」と生徒に投げかけたり、クラスの他の子どもたちと一緒に考えたいものです。その中で教員として責任をもって判断を出します。親や子どもが望んだからではなく、教師として自宅に引き篭もった生徒には『友人に会うことが必要である』そのような自分の決定として判断を下す、それを単にご要望に応えたということだったら誰でもできることになります。ですから『友人を伺わせましょう』『今は控えましょう』そのようなときは教育の視点をいつでも捨てないことが絶対に必要です。そしてその判断に対して結果がでます。客観的に分析して下さい。「友人が必要だと思ってクラスの子どもにお願いしたけれど子どもは出てこない」それはどういうことなのか、反省し考えることは子どものこころを知る、把握するうえで重要な機会です。また『自分は何ができるか』と考える際に、自分の限界と責任を絶えず問いかけながら接するということも基本です。傲慢さや巧名心や過度のあわれみは、ときにこの基本を忘れて、教育の対応をかえって混乱させるもとになるときがあります。

それから先生のお話の中で、小学生四〇％、中学生六〇％が次年度も学校に行かれないとのこと。これは深刻にも受け取れますが、自宅に引き篭もっても教育はできるという考えを忘れないでいただきたい。ある先生の実践で不登校の子どもが学級通信を出しているんです。クラスのニュースをその子どもの自宅に送って、不登校の子どもが新聞を出している。人気調査等リクエストに応じたり（笑い）びっくりしました。学校には来られなくても立派に学級には参加しています。

二年間も学校に来られなかった、少しも変わらなかったという見方は粗雑すぎます。その来られない期間の中に、子どもは一日と同じ日々はないはずです。いろいろ悩んだり、怒ったり、甘えたり、何も考えなかったり等、そのようなことをつぶさに考え評価してあげることが、大人の援助の中でも

重要な一つと思います。学校に行くことよりもある子どもにとっては、もっと重要なテーマがあるのかもしれません。登校強迫という状態があります。こころが疲れても学校に行ってしまう、休みたいけれども休んでしまうと不安を更に積み重ねてしまう子どもがいます。不登校と逆にみえますが、このような子どもはあるテーマに直面することを避けるために不自然な通学を繰り返してしまうのです。通学再開を焦らないで今までのことをじっくりと『おさらい』する態度が大切です。

次にどのような状態のときに学校外の機関にお願いするかという質問に応えます。これも親によってさまざまです。早期にでも医者に診てもらいたいという場合もありますし、そうでない場合もあります。そのこと自体がそれなりに全て意味がふくまれていると思います。自分の責任では難しいので、専門機関を勧めてみたがえらく抵抗される。そういうときは「判ってくれない」「やはり偏見がある」というだけではなく、その答えに意味や事情があることを考えてください。

とにかく紹介をするためには、教師自身が学校以外の地域の社会的資源に対して開かれる、あるいは親しくなっておくということが大切です。学校のことを相談することは教育を放棄するということでは決してありません。医療の受診でも施設に入所しても教育は可能だと思います。教育を受ける権利は子どものものです。

登校の刺激を避けるために『学校は関われない』という場合もあります。しかしそれは学校の存在が否定されたわけではないのです。医療にかかっている親や子どもにとってそれで安心をしたかというと決してそうでもないことが多いわけです。あるいは医療の子どもでも進路やその他の悩みはつきものです。そのようなときは教育現場のきめ細かな指示が重要になります。きめ細かな指示は地域にある現場がよく知っているはずです。子どもを中心にして地域の活力を集めるように教育が背景で指示してあげる、具体的な情報の基地になることは重要です。ただ「相談所をお勧めします」これは冷

たい言い方です。「相談所のA先生はよく知っていますから電話をかけておきます」とか、その子どもや家族にあわせて相談を具体的、個別的に考えたいものです。一般的な紹介基準を考え込むことよりも、気楽にご自分が相談をしてみること、あるいは地域の特殊性を把握する方が紹介の際には役に立ちます。

○菅　ありがとうございました。

今のテーマに関して、できたら先生以外の方がいらっしゃったら少し。

○阿部　何か誤解なさったような言葉にとらわれたような向きもありますけれども、やはりいかに基本点にして、私どもは学校の担任と、いろいろな相談機関とやっていかないとうまくいかないという問題があると思っています。

やはりそういういろいろな場面の先生方と話し合ったり、コミュニケーションをとりながら、一人の子を指導していかなくては困るという問題が毎日の生活に出てきます。私なんか一週間に二回ぐらい、飛び回っていることが多くて、お医者さんのアドバイスをいただいたり、また返すべき担任の先生とも話し合ったり、そうしながらやっていかないと、一人の子どもを何とかしようなんて、そんなだけでは何ともならないという問題があります。

○菅　もし不登校の子どもをお持ちの方がおられましたら、質問でも御意見でも、お聞かせ下さい。いかがでしょうか。

○――　藤沢の方から来ました。

実際に私も三人子どもがいまして、一番上が中学一年の娘なんですけども。二学期に入ってから学校に行かないということになった。いろいろ相談しているんですけれども、なかなか大変です。実際に学校に行かなくなって、私は勤めていますので、日中のことは余りわからないんですね。非常に今

困っている。

なぜ困っているかというと、いわゆる親の判断といいますか、義務教育なので、学校に行くのが当たり前だという、そういう考えがあるんですね。ところがある日突然子どもが学校に行かなくなった。しかし生活が百八十度違ったのかというと、学校に行っていたときより非常に明るくなっている。非常に皮肉なんですね。ほかのみんなが同じように学校に行っているのに子どもは学校に行かないで、かえって自由に伸び伸び自分の時間を使っている。

うちの子だけが特殊じゃないか。つまり、ほかの近所のお子さんが喜んで行っているというふうに見えるんですけども、それに比べてうちの子は仲間に入っていけない。子どもの性格的なものがあるかもわかりませんが、どうしたんだろうと考えてしまうわけです。

うちには年寄りがいますので、小さいころから過保護、あるいは干渉し過ぎるということが周りから返ってくるんです。実際に親戚とか、兄弟などから「なぜ学校に行かせないんだ」ということで、非常に身につまされるような、批判的な言葉を聞くんです。

もう一つやっぱりわからないのは、学校に行く、学校に行くのが当たり前だという考え方ですね。我々が小さいころはそんなに不登校という問題がなかったように記憶しているんですけれども、学校に行かないことによって、かえって自分の時間を持てるというような状況があります。今、学校に行かないのは本当に悪いのだろうか。つまりそれぞれの生き方があるから、いいんじゃないかという気持ちと、やっぱり行ってもらわないと困るんだという気持ちがあります。親の立場というのが非常に揺れ動いているんですね。その辺のところが非常によくわからないんで、今非常に迷っている。

今一年生ですので、あと二年、三年、ずっと不登校が続くと、子どもはどうなっちゃうのかなと。どこまで続くか心配しているんです。

この会場にはほかに不登校を抱えていらっしゃる父母の方もいると思うんですけれども、いいアドバイスをいただければと思います。

○**菅**　どうもありがとうございました。

ぜひこれはパネラーの先生方のご意見を聞きたいと思います。

皆さんで少しずつでもいいですから、マイクのある順番で結構です。

○**竹内**　お父さん自身がお困りです。これはお父さん独りの困り感ではなく、家にいる娘さんの気持ちを映しています。不登校でも『明るくもなったからいいや』という気持ちもありますし、同時に『将来のことを案じて出口が見つからない』という心配もあります。これも明るく振舞っているお嬢さんの気持ちの影の部分が確実にあると思います。このときに女の子も素直におしゃべりを誰かとできたら良いのにと思いました。今のお父さんのようにしゃべれたら良いのにとも思いました。子ども自身が自分の気持ちをしゃべりながら、問題が見つかったり、解けたり、楽になるというふうに私は思っています。

「学校に行けなくて嬉しいわ」「でも勉強が気になっちゃう」思い付くままに言葉に代えてみたら良いのです。矛盾したり、実行と言葉が離れてもかまいません。そのようにして気分や感情を身近な大人に伝えられれば、そのことで子どものこころのエネルギーは高まってくると信じております。胸の中で秘かに悩んだことも、打ち明けてみればきわめて似ていたということがよくあります。その途端に悩みは消えてしまいます。些細な馬鹿らしいほどのことで立ち往生するのが悩みです。価値あることで考え込むことは悩みになりません。だからこそ独りで抱えてはいけないのです。

私の子どもの話をします。登校を渋ったときがありました。赤ちゃんみたいになりました。こころが悩むときの常です。そして必要以上に強がったり不機嫌につっかかりもしました。これもよくある

子どもの状態です。そのときに添い寝をしました。私にもツッパッていろいろ言いましたが、そのうちに眠気の中で私の耳タブを触れてまさぐるのです。また寝かしつけて布団から早目に抜けでようとすると、余計にしがみつきます。そのときに暗闇の中で、この子どもは心細くなって愛されることに赤ちゃんのように飢えている、そう実感しました。子どもに振り回されると気が付きにくいことですが、威張る子どもも不幸なものです。赤ちゃんのように上手に甘えるには年齢が上過ぎるのでしょう。ストレスに見舞われたときには上手に赤ちゃんになれることも、一つの才能だとも思いました。

話が前後しますが、質問自体がすごく嬉しかったのです。お母さんではなくお父さんがこの会場で質問されたことです。

「母親は家庭の太陽であるべきだ」と阿部先生が話されたときに思いました。なぜ父親が登場しないのかと疑問にそのとき思いました。男女平等を教育は主張されているのですから、子どもの問題を考える際には父親も母親も視野の中にいつもいれておくことが大切だと思います。お母さんが疲れたらお父さんにバトンを渡し、お父さんが疲れたらお母さんが出る、このような連携が問われていると思います。

学校に行かれないことに対して家族はもちろん困っています。しかし不登校にまつわるその他のことで更に困惑を深めてもいます。子どもも同じです。例えば同居をしている年寄りの顔を伺ったりして息を潜めて不登校を続けた場合もあります。そのときに父親が家長として妻を守ることによって、今度はお母さんが家庭で働くやすくなります。その結果お母さんのこころは余裕が生じて、こころのエネルギーが子どもにプレゼントされるという循環が生まれます。

特に今のご質問はお嬢さんですから、父親があげられるものは限られているようにも思えます。父

親は母親を守っていく、元気にしていく、そして家庭の雰囲気を明るくしていくようにする、そのような間接的に娘を支えることも重要です。こころのエネルギーが満たされれば子どもは動きます。赤ちゃんの乳離れのときと似ています。お腹が満たされればしがみつかないで、母親から離れて遊びを始めます。こころも同様です。

学校に行かれないが、塾やいろいろな所に行ったり、運動したりすることは健康なことです。家の中に理由が何であれ、閉じ込もっていることは、それ自体ころのエネルギーが枯渇していることを示唆しているのかもしれません。学校以外の子どもの健康的な『こころの窓』をぜひ育てあげて下さい。

○**阿部**　中学校の生活にとって、父親の考えというのは、私の方も重視する。父親というのは、世の中のいろいろなルールを背負って、そして仕事もして、そういう立場で子どもを見つめているのではないかな。

母親というのは、小さいときからずっと育児べったりとくっついてきて、そして中学の受験になったときは、父親は父親としての出番が出てくるのではないかな。それは何も父親が一々子どもに直接当たらなくても、後ろからお母さんをバックアップすることで、話し合いとか、そういったことで、支えることで、多分子どもに何となく伝わっていくんじゃないかと思います。

ですから、厳しく言うと、父親というのは母親と子どもを切り離す、社会生活に追い込むのが父親の役割なのかな、なんて考えています。また激論の方にいきそうで。（笑い）

○**竹内**　阿部先生の話は私にはすごく刺激的でして（笑い）割り込みます。

夫婦で話し合う、これは危機のときにはやめた方が良いと思います。問題が起こると話し合う。子どもに原因を執ように問いただす。よくみかけます。動揺や不安がそうさせるのです。「なぜ休んだのか」と子どもに聞くよりも、それよりも子どもの現在の気持ちを、言葉に出さなくても支えあうこと

が大切です。子どもは大人の同じような質問にうんざりもしています。その気持ちをくんであげる方が先にすることです。さらに「守られている」雰囲気をプレゼントすることが先だと思います。

夫婦で子どものために話合いを深めることによって、かえって亀裂を深めてしまうといった皮肉めいたことがよくあります。子どものためにと力むこと自体、不自然で動揺している証拠かもしれません。振り返れば判ります。皆が努力しようと、しかも善意に努力してもうまくいかないことがあるのです。教員や親もそうですね。渦中にいる当事者は一生懸命やりすぎるのです。相手を追い込んでしまうのです。判っていることを指摘されたら誰しもがプライドを傷つけられ、不機嫌にもなります。当然のことを指摘されれば誰しもが悔しくなります。しかし余裕のないときは誰かのせいにもしたくもなります。

一生懸命の悲劇です。皆が皆、苦しんでいるということを判りあう、これが大前提に思います。つまり答えにくいことは敢えて尋ねない、話し合わないことも一つのコツかもしれません。

○菅　少しきょうはシンポジストの間で意見対立が生じて、議論してくださいと、ちょっとふっかけているんです。ですから、今の議論はとってもいい光景だと思います。

○阿部　そこでですね(笑い)、そこでやっぱりここがわかり合うというか、言葉で話し合ったら、本当に今先生がおっしゃったように、突き詰めて追い込んでしまうと思うんです。

そこいらが私ども教師として、口はうまくないですけれども、つき合いの中でお母さんに、そのつき合い方とか、お父さんとお母さんの間に立って、いろいろ指導したりとか、お茶飲み話をするところなんです。

ですから、理論的にはうまく言えませんけれども、そういったなごやかな雰囲気というのは、子どもをそう追い込まないですむんじゃないか。もしかしたら、子どもは今休息をしているのではないか

と考えてもいいと思うんです。いずれ立ち上がると思います。

やはり思春期の子どもですから、お楽しみに目を向けようとする気持ちが、心のゆとりが出てきますと、必ず向くと思います。余り先を暗く考えられないで、ゆっくり休ませるのが一つ方法じゃないかと思います。

○**菅**　それでは両方の先生をわきで見ていた中西さん、お願いします。

○**中西**　最近、お父さんが子どもに関心を持たれていると思うんですね。お父さんが相談に見えるというのが結構あるんですね。いらしたときに既にいろんな情報を持っていらっしゃる。「こういう意識も子どもには必要なのかもしれないですね」ということを前置きしながらおっしゃる例が多いんです。

それだけ子どものことを認めていくということが少しずつ理解されているのではないかなと思うんです。わかり合うというのはすごく大変なことだと思うんです。夫婦であっても、わかり合うことは難しいので、やっぱりわからなくてもいい。だけど、認め合うとか、そういうことで成り立っている。その関係、それが信頼関係だと思うんですね。

だから、子どもが今そういう状態にあることを突き詰めてどうしてだろうとわかろうとすることは難しいんじゃないかと思うんです。ただ、そういう状況にあるんだなということを認めていくのが一番いいんじゃないかなと思うんですね。

引きこもってしまったお子さんとつき合っていて「今日はとってもいい風が吹いているよ」と報告し、「鳥の声がするね、何ていう鳥だろう」と一緒に鳥の声を聞く。「じゃあ、又くるね、バイバイ」と帰る。そんなくり返し。ただ一時を共有する。それが、人と関わって行こうとする呼び水になることもあるようです。

○**菅**　ほかに。

○――　県教文研の広瀬と申します。

中西さんの茅ヶ崎サポートネットの活動についてもう少し詳しくお尋ねしたいと思います。

中西さんは、茅ヶ崎サポートネットの活動として、三点ほどあげられました。まず一つは、相談を受け付けること、もう一つはニュースの発行、それから最後に子どもの居場所づくりということです。

そこで質問なのですが、茅ヶ崎サポートネットには不登校の子どもはどれくらい来ているのでしょうか。またここでは、子どもを学校に復帰させるための「指導」のようなことはやっているのでしょうか。阿部さんの場合には、子どもへの「指導」ということを重視しているようですが、この点で相談機能や居場所づくりを重視する中西さんとは、対応の仕方が異なっているように思われます。こうした二人の違いについてどのように考えているのかについても、できれば聞かせて欲しいと思います。

子どもへの「指導」にこだわるのは、実は文部省がこの九月に出した「登校拒否問題への対応」に関する通知にかかわるからです。この通知というのは、周知のように、学校外施設に子どもが通っても、そこで相談・指導を受ければ指導要録の記載において出席扱いにするというものです。

文部省もなかなか柔軟な姿勢をみせるようになったという感じを一見抱かせるのですが、この通知をよく読んでみるとそう簡単には評価できない面を持っています。

まず通知でいう学校外施設とは、適応指導学級や教育相談所などの公的機関を主に指しています。民間施設に関しては、ガイドラインが決められていて、それをクリアーしなければ出席扱いにはなりません。そこで問題はガイドラインの内容ですが、そのなかに「学校復帰のための指導を行うこと」という基準が入っています。「義務教育制度を前提」という言葉も使われています。つまり、学校復帰のための指導を行う施設でなければ、適切な施設として認めず、また出席の取り扱いの対象にもならない、ということです。

そうなると、子どもの居場所づくりを目的にした民間施設は、どうなるのか。おそらく学校復帰のための指導を行っていないということで、認知されない可能性も出てくるのではないか。この認知に関する最終的な判断は、学校長の権限に属しており、学校長のとらえ方によってどうにでもなることがらなのですが、しかしガイドラインがある以上、公的機関を中心とした学校外施設に限定していくという動きが強まっていくのではないでしょうか。このようなわけで、「指導」ということのもつ意味はかなり大きいと思われるので、以上のべた点に関する中西さんの考えを聞かせていただきたいと思います。

○**菅**　それでは中西さんお願いします。

○**中西**　まず私たちと子どもとのかかわりは指導をやらないということで、学校外施設ということとは全く違うんじゃないかと思います。子どもを指導するためにかかわるのではなくて、スキンシップのような形でかかわっておりますので、私たちの居場所は不登校の子どもたちのためにということではなくて、すべての子どものためにという方針でやっております。たまたまそこに学校に行けない子どもも来る。

ですから、何名ということもほとんど申し上げられないくらいになる。たまに遠くから銀河クラブという名まえが気に入ったと言って埼玉の方から二時間以上も時間をかけて見に来たりしています。一回、二回来て「ああ、こんな雰囲気か」と納得して帰る子もいます。そういった全くフリーな活動としてやっております。

ですから、学校へ返すとか、そういうことは考えていません。自分自身で学校というものにこだわりはそれぞれ持っておりますので。もともと中学生のためにつくった会なんですけれども、高校でも引き続き来たりしています。高校に行ってから学校へ行かれなくなったり行きたくない子どもたちも

何人かおります。お友だちと一緒に学校の情報を交換したりしている。

さっき文部省の学校以外の場所を認可するというお話がありましたが、こういう見解が出たということで、かえってそういうところにも行かれないという、新たな圧迫が子どもたちに生じるという考え方もできます。現にあると思うんですが、私はもっと逆手にとるというか、私たちの解釈の仕方をもっと一般化し拡大いたしまして、こういう見解が出たということは、教育を受ける方が場を選ぶ範疇が広がったというふうにとってしまえばいいんじゃないかと思っているんです。

ですから、どんなふうな形で学んでいくかという、そういうスタイルを選んでいける。範囲を広げていくという一つの視点でいいんじゃないかなと考えています。

○菅　時間を四時半をめどにやってくれと言われているんですけれども、せっかくここまで盛り上がっていますから、もう一方ぐらい質問をお願いしたいんです。もしこの中に、元不登校だったという方はいらっしゃいませんか。

そういう方がいらっしゃったら、よければ何か一言言っていただければ大変ありがたいと思います。

――いませんか。

それではどなたでも、これだけはちょっと聞いて帰りたかったんだということがあれば手を挙げてください。

○――　先ほど阿部先生は、早期発見早期治療、不登校の子どもたちは発達のどこかにおくれがあり、自我の芽生えがちょっと遅いというような内容のお話があったんですが、私の子どもは、今、中三なんですけれども、中二のア・テストを受けて、それから不登校になった子どもがいるんです。健康的で、お風呂がすごく好きです。本当にこれは治療の対象なのか、本当に自我の発達のおくれがあるのか。

この子が申しますのは、学校は勉強だけだと言うんですね。先生は「勉強、勉強」と言うんです。

それから下の子ですけれども、この子も不登校が長くて二年になろうとしているんです。私の目から見ますと、非常に自我の発達が未熟です。ただそういうことは親の口から言えばというところもありまして、そんなふうには見えないんですね。そういうことでいかがでしょうか。

○**菅**　シンポジストの方から逆に質問していただいたりしないとわからない状況もあると思いますけれども、できたら阿部先生、竹内先生、両方からお意見をいただいた方がいいかと思います。

○**竹内**　医療にかかるべき子どもの見極めの話をします。

『病的な手洗い』と『きれい好き』の違いの目安を簡単に述べます。常識で考えることが第一に大切です。次にそのことでどのくらいの時間をとられるかと考えることです。生活全体が清潔のために脅かされる、これは『きれい好き』を越えています。

手洗いではない場面の子どもの『こころの点検』が大切です。母親は身近なためにかえって子どものこころの変化に気づきにくい点があります。父親や教員や、親戚の人の目からみた子どもも重要です。距離をおいて、あるいは無責任である第三者ゆえに素直に子どもの姿が見える場合もあります。

また休み中の過ごし方も子どものこころの状態を把握するのに役に立ちます。不登校ではなく、日本全体が休みのときです。例えば夏休みです。そのときに年齢相応の尺度から考えて子どもの実際の休みの過ごし方を考えてみます。あるいは去年の過ごし方から比較して考える。回りの兄弟から考える等してみることも、子どものこころの具合いの変化が判ります。

これも医療への見極めになると思います。

また二年間学校に行かれていないという、期間の長さも大切です。このお子さんは医療にかかったほうが良いと思います。その際に子どもが医療をいやがれば親だけでも相談にいくことを勧めます。医療を受けることが重症であるとか、敗北であるとかあまり力んで決めつけないほうが良いと思いま

す。信頼できる、通いやすい病院を学校の先生に相談されるのが良いと思います。

○**阿部**　先ほどお話しいたしましたとおり、これは医療の方がいいとずばっと言いましたけれども、このような状態のときに、私たち素人では何とも、そういう経験がないわけです。指導がやっぱりできない状態に確かにあります。

私ども学級の担任には必ず医療的な、お医者さんのカウンセリングの組織があるんです。そうでなければ、この間入ってきた子なんかは、こういうとがったものを見ると、「もしかしたら僕は人を刺してきたんではないか」。こういったお子さんも入ってくるんです。そういったときに「いや、まさかそんなには」と言っても、そういう常識以上の異常を起こしているのではないかなと思われることの場合は、私たち素人でそれを何とかしようなんてことはできないことです。やっぱりお医者さんのカウンセリングがないとできない状態だと思います。

でも、今、娘さん、やっぱり休息している状態でしょうし、学校に行かないときに、どう過ごすかが問題だと思うんです。ただ、テレビを見て、コンピューターをしてじゃなくて、長い間うちにおりますと、何か自分でどう過ごしたらいいか、少しずつ考えてくるようになると思うんです。そういう指導をするのが私たちの立場なんですね。

うちでゆっくり休息してもいい。ただ、適当な刺激を与えてあげないと、自分でどう過ごしたらいいか自分で悩んでしまうという現象が起こっていますので、やっぱりその辺でアドバイス、指導するのが始まったわけなんです。

私どもの学級にもいろいろなお子さんがおりますけれども、一概に余り詳しく言えない部面を抱えているだけに、割とズバッというようなことを言いますけれども、もっともっと奥の深いいろいろな要因を抱えて来られる方が多いんじゃないか。

答えになるかどうかわかりませんけれども。

○**菅**　よろしいですか。まだ、御不満が残るようでしたら、一番核心の部分を名指しでどなたかに聞かれても構いません。

○――　私が申し上げたかったことは、不登校は病気なのかどうかということですね。それから病気があって学校に行けないのか。そうではなくて、何か原因で行けなくなったから、今までの社会、世の中の動きに乗れないから、自分自身追い込まれて、そういう子たちがよく手を洗うとか、毎日お風呂に入ったりする。毎日お風呂に入るというのは、皆さん入っていらっしゃる方がいるんじゃないかと思いますが、そういう意味で申し上げたわけで、子どもがよくなるということをその子自身がどう判断するのが本当だろうかと思うんですね。

と申しますのは、子どもはちょっとそういう傾向もありますけれども、友人と遊びますときに、来てくれればまた遊べる。親の時間、学校の時間、それに子どもの時間がなければ、子ども自身、ただ学校に行きますというだけではだめだと思うんですけれども、いかがでしょうか。

○**竹内**　不登校が全て病気である、あるいは全て病気ではない。このような二分法は実際的ではありません。また社会が悪いという一因論も問題です。一人の事例でも、ある時期や状況でその因子は複雑に入り組んでいます。

ただ大切なことは学校に行けないということは、子どものこころの中に大変なことが起きているという関心をもつことです。軽く考えないことです。学校に行かれないという現象は、こころの不安の「氷山の一角」として生じていることがよくあります。子どもの生活圏全体を具体的に考えることが大切です。

例えば次のような結論の不登校でも援助は必要です。大変ひどい学校でいじめられるし行かないの

が当然だという場合です。そして子どもも家で明るく元気に振舞っている。そのときは子どもの不登校の選択は正しい反応ともいえます。しかし学校をそのことで長期に休み始めることは、やはり大変なことです。学校の日課がなくなったときに、子どもはその時間をどのように過ごすか、日課を組み立てる必要があります。その意味では一見自然な不登校であっても大人の援助や関心は要ります。学校にとらわれないということは簡単ですが、渦中の当事者は大変なものだと思います。

そのためにも繰り返しになりますが、不登校は病気か否かという考え方は短絡的すぎると思います。薬にしても同様です。私が安定剤を飲んだから病気だ。精神科医にかかったから病気だ。人格を薬や精神科医で単純に振り分けないで欲しいと思います。私自身、毎日病院に行って精神科医に会っているということになりますから（笑い）。

○**中西**　学校は時々休んだ方がいいんじゃないか（笑い）。それだけです。

○**阿部**　私もそう思うんです。相談指導学級を持っているときに、やっぱり子どもに休息が必要なんだなとつくづく思っているんです。ですから、休みたいというときはだれだってあるでしょう。月曜日のいやなこと。集団に行くときのいやな気持ちというのは子どもにもあると思うんです。その月曜日が二日になり、三日になると今度は行きたくないということになっていってしまうので、そこいら辺やっぱりわかりながら、そこいらなるべく早期にそれを発見してあげるということが、「治療」という言葉はやっぱりお医者さんの言葉じゃないかと思います。私のは「指導」。

○**菅**　それでは時間が大分超過してまいりましたので、ここで閉会いたします。きょうは先生方お二人、それから子どもさんを持っておられるお父さんとお母さん、非常にバランスのいい議論ができたんじゃなかろうかと思います。

どうも長時間ありがとうございました。（拍手）

―閉会―

参加者感想文

◇　竹内先生のお話がとてもよく理解出来ました。

わが息子が登校拒否中ですが、やはり担任との関係が上手く出来ません。教師も一人の人間として子供と育っていくのではと考えています。が、担任はやはり教師として「指導」というそれを全面に出していることです。そして、学校へ来なければ勉強は出来ないと思っていることです。阿部先生は、やはり教職を全身ににじみ出しているように感じました。阿部先生の「指導、指導」という言葉は、少しごうまんではないでしょうか。

◇　竹内先生のお話の中にありましたように、愛が全てを解決するカギであること、とても共感致しました。子供自身で立ち直れる日々を希望しつつ、子供のエネルギーになれますようにと願っています。

◇　深いところまで知らなかったことをきけてよかったです。この話をこれからどこかに役立てていきたいと思います。私もあの子と一緒にいろいろ話をしてすこしでも近くなれるようにしたいです。

◇　第一回のシンポジウム記録も興味深く読ませていただき、たいへん勉強になりました。今回は参加することができ、さらに自分のエネルギーになったように思います。

相談指導学級を担任して三年目です。子供をよく知ることから始まり、指導というより「この子に何をしてあげられるか」を子供と話をしながら「援助すること」を基本に学級を運営しています。特別な知識もなく、このようなシンポジウムや講演会などで勉強したり、本を読んだりしているくらいで、暗中模索の日々です。いろいろなお話をいろいろな角度でうかがえ、大変参考になりまし

た。こういう仕事（相談指導学級の担任）をすることで、子供から得ること、いろいろな先生方から得ること、それが自分の人生観も少しずつ変えているような気がしています。どういう方法がよい方法か、まだまだ自信を持ってできませんが、子供たちとまたいろいろ悩みながら頑張っていこうと思います。今日はありがとうございました。

◇　現在、秦野市の本町中の中にある相談指導学級で、生徒とともに活動しています。

生徒の中には、以前精神科に入院していて、同じく母親は何度も入退院を繰り返しているような環境の子どももいます。子どもの方はこのクラスでの学校との関わりが一年半くらいたち、ずい分変わり、病的なようすもなくなってきましたが、母親はやはりもっと深刻で、病院とのつながり、薬とのつながりで、安心しているようです。

今日の竹内先生の話の中で出てきた例にも似ていますが、このような精神的問題を抱えている親への対応のむずかしさを感じています。例えば、このお母さんが通っている病院とアポイントをとり、アドバイスを受けることをやってみようかと思いました。それから、できる限り地域でこの母子が安心して生活できるような場をさがしてみたいとも思いました。

◇　私は小学校の相談指導学級を担任しています。

第一回のシンポジウムの冊子を読み、ぜひ二回目は聞きにいきたいと思い参加しました。直接子どもを担任しているということで、阿部先生の話はわかりやすかったし共感する部分も多々ありました。

また、精神科医の先生の話も参考になりました。それは、不登校の子はとても不安定な心をもっていて、どうしても専門的な医師の話は参考になるし、ためになっています。ぜひ、こういう機会をたくさん作って欲しいと思います。

◇・わが子二人の不登校の体験があります(長期間)。現在、子どもの居場所と親の会をやっています。
・不登校は問題でしょうか？「立直り・立ち上がる・指導・早期発見・早期指導・治療」などの言葉の多い阿部先生の姿勢に、一段高いところからものを言われている違和感と不快感を感じました。
・竹内先生の事例の話、感動しました。
・わが子は「登校拒否をしてよかった」という現在です。親子共々得るものが多く幸福になりました。学校には二人共戻っていません。
・子どものことは、子どもの声に学ぶことが必要だと思います。頭越しの感じがします。何がよかったかどうかは子ども自身が判断することだと思います。

◇　江陽の相談学級へは、身近に以前から何人かの生徒がお世話になり、その子らすべてが見ちがえるような生活改善をしているのを見て、阿部先生からどのようなお話が伺えるかと楽しみにして来ました。家庭訪問のようすとか、私も教員なのですが、具体的に教えていただいたことが、これからの指導方法に役立つのではないかと思いました。これからも具体的な事例を教えていっていただけたらと思います。

◇「土曜日の午後の貴重な時間なのに…」「あー雨の中駅から歩くんだ…」と思いつつやって来ましたが、前半のお話でそれらの気持ちもふっとびました。
　学校でも先生をやって、家に帰っても夫も教師、息子達に対しても「先生をやっているような…」そんな毎日の中で、学校現場にいらっしゃらない方のお話を伺うことが、いかに大切かを痛感しています。一生懸命子ども達のことを考えているつもりの私ですが、「本当にそうだったのか？」と自問しています。竹内先生のお話とてもよかったです。(ここまで休憩中に書きました。)
　上記のこと、不登校児に関わっていない（担任として、親として）無責任なたわごととはずかし

く思っています。結局、親として（父として、母として）とか、教師としてとかというような立場で子どもを見ないということのような気がします。

阿部先生の「べき論」――「母は太陽で…」やっぱり苦しいです。体調もすぐれなくて療休もとりましたが、「一人ぐらい体が丈夫でない教師もいていいよね」と学校に行っている自分として、苦しいです。今、家族にとって太陽にはなりえていないので…。今、少し年上の大人として、同じ人間として、今自分が受け持っている子ども達をもう一度見つめてみたいと考えます。そういうきっかけを作って下さった今日の会は、とても有意義でした。ありがとうございます。

やはり、「学校」が問われているということでしょうね。地域の声、うわさを素直に受け入れてみようと思います。走り書きで…読めるでしょうか。

◇　ぼけ老人をかかえながら、長男が不登校、弟を担任していた私のもとに母親は、大学ノートに何ページにもわたり心の内を書いてきました。そんな時、江陽中に相談学級ができたことを知り、長男長女が江陽中にお世話になっていることも含め、いろいろと見聞きし、大変うらやましいと思っていました。茅ヶ崎にもぜひと言い続けてきましたが、形ばかりの状況で残念に思っていました。今日、阿部先生、竹内先生のお話、重くズッシリと心に響いています。一つ一つ納得し、また理解しようとしているつもりでも、やはり毎日毎日の教育活動の中ではどうかと自問自答しています。たし算ができない…つい無理強いしてしまいます。

先日、前述の不登校の子を見舞いに行って話してきました。人恋しくずいぶん話してきましたが、とても素直でした。私は、この親子を通して沢山のことを教えていただいています。（本当に感想だけですいません。）

◇　現在、不登校の子をかかえている私にとって、子どもにしてあげられることは何かということを

あらためて考えさせられました。何もしてあげられないという敗北感をすてて、してあげられることをさがしていく努力をしたいと思います。

◇　長年心の病の子ども達と関わっている三人のシンポジストのご意見が聞けて大変参考になりました。私自身も五～六人の生徒と関わってきました。一人一人拒否の要因は違いますが、もう成人となり家族を築いている者もおります。長い目で見ていくことと、社会の目を気にせず本人を支えていくことが大切なのではと思います。私も専門機関に足を運び、そこでベテランの指導員に巡り会い、いろいろ教えていただきました。学校の職員が出来ることには限りがある。他の機関との連携プレーが大切といわれたことが私の大きな支えでした。拒否の子に対して出来ることは何か、支えて行く面はどこか等々を、専門の方々のアドバイスを受け判断し、親とも連絡とりあっていくことが第一歩だと思います。三人のシンポジストからもそれが確認できました。

◇　こういう会に参加すればするほど益々深みに入りこんだような気がします。よく、学校に来れなくなった時はスタートではなく子供が疲れ果てて「もうダメだ」のサインなのだといわれます。その時担任として何が出来るのか、または、何をしてはいけないのか、いろんな方々の考え方によっても全く違った意見があるので（本日のパネラーの方々のように）どうしても親の方針にふり回されて行動しがちの現状です。マニュアルのない問題だけに、正しい対処はこれだと決めることはむずかしいのでしょうが、今日のシンポジウムはとても示唆的で影響を受けました。

◇　不登校の子が私たち大人に与えてくれているいい面を見ていこうとすることに興味をおぼえました。そういえば、今日このシンポジウムに参加して何かを学ぼうとしたのは、うちのクラスに不登校の子が出たからです。もし、不登校の子がいなかったら今日この会に出ようとは思わなかったと思います。不登校についていろいろ学ぶなかで、まず教師である自分が変わっていける喜びがあり

ます。そしてそれが、いつか何らかの形で不登校の子たちに良い影響を与えていくのではないかと思っています。不登校の子たちは、今私たち自身が抱えている問題に光を当ててくれているのかもしれませんね。そういう子たちを大事にしながら、教育というものを考えていきたいと思います。今日はありがとうございました。

◇　シンポジストの方々のいろいろなお話を伺い、大変参考になりました。

子供たちと毎日接していると、良い面より悪い面につい目がいってしまい、それを何とか良い方向へ向くよう自分では努力しているつもりです。しかし、それが本当に子供にとってどうなのか、もう少し他のやり方があるのかもしれません。

私は不登校の児童を持ったことはありませんが、今後この問題は多くなっていくように思えます。今日のお話にあった早期発見・早期指導に力を入れていきたいと思います。

◇　今回のシンポジウムに参加しまして、様々な明日へのメッセージをもっている子ども達と接する教師として、また人間として、これから生きていく上での重要なことば・話を聞くことができました。「子ども達の中で学校の占める割合を減らそう」「一人ぼっちの救われ方について」「自分らしい健康さについて」など、私の頭の中で繰り返されているところですが、それらの事柄をどう自分なりに吸収し動くことができるのかが、はっきりしてくるのにはまだ時間がかかりそうです。頭でっかちな私ですから一度失敗してみないとわからない。経験してみないとわからないのかもしれません。しかし、本当にそれを経験、失敗した時に、今回参加したことでとり乱してとり返しのつかないことだけはしないでいられるのではないかと思えてきました。

◇　今回はじめてこのようなシンポジウムに参加させていただきました。

不登校の問題について自分なりに多少は知識を持っていたつもりですが、阿部先生がやっておら

れる相談学級のことなど、初めて知ることも多々ありました。自分の知識の量の低さを痛感しました。このシンポジウムに参加して強く感じたことは、三人のシンポジストの方々のそれぞれの立場の違いでした。三人の方々の意見は、それぞれもっともな意見だと思いました。中でも私は、竹内先生の意見が一番理想的だと感じました。ただ、教師の立場親の立場それぞれの人の考え方があり、そういったものを無視することはいけないと思います。これからは、もっと立場や垣根を越えた意見の交換や相互理解が大切だと思います。真の連携をめざして問題は多いかと思いますが、みんなで努力しなければいけないと感じました。実際に悩んでおられる親の方々の切実な声も聞くことができ、本当に勉強になりました。ありがとうございました。

◇　この様な会がもっとたくさんあるといいと思います。また、子ども達が話し合う場も作ったらと思います。また、学校自体がもっと開かれて、親たちも教師に背負ってもらっているものを自分たちに取り戻す気持ちを持つべきだと思っています。

　親も子も教師も、相手に対して思い込んでいるところは大きいのではないでしょうか。子ども達は今、私たちが作ってきた社会に対して拒否しているのだと思っています。何もかもを、効率ではかってしまう今日、その社会自体を大人が認識する時なのだと思います。それを考える機会を子ども達が今教えてくれていると思っています。

　子ども達の権利は、いったい何才からあるのでしょうか。

◇　具体的な話で共感する所が多かった。受容、共感、共生か、方向指示定型か、議論があって面白い展開だったと思う。

◇　「不登校という自分のおかれている状況の中で『何もできないのか』と悩むよりも『今何が出来ているのか？また何が出来そうなのか？』を振り返ると、自分の成長のすばらしさを実感できるので

はないか」という話を聞いて、否定的な面だけでなく、肯定的な面にももっと目を向けなければならないのだと強く感じました。

◇　各先生の意見が微妙にくいちがっている点、問題解決の困難なことを感じた。
竹内先生の意見が一番私には納得が出来た。

◇　昨年も出席しましたが、率直な意見や経験談がとても参考になりました。できればもっと横浜に近い所でやっていただきたい。

◇　学校に適応できない子を、適応できるようにするのが大人の役目なのですか？
適応できない子を認めるのが役目なのですか？　むずかしいなと思いました。

◇　竹内先生の話された二つのケースのことがとても印象に残った。
親、教師、医師と三者の立場の違いが出ていておもしろかった。
一回目の冊子を読んで興味を持ったので参加しました。

◇　今日のシンポジウムは、思春期の子どもについての話が中心で、その点については大変参考になる話であったと思います。欲を言えば、私は小学校の教師なので、直接小学生に関する問題等も話し合いの中に含めていただけたらありがたいのですが。
前回は冊子にまとめられた記録を読んだだけですが、大変参考になりました。ＰＡＲＴ３についても、おおいに期待し、参加したいと考えています。

◇　一般参加者の質問がパネリストに集中して終始したが、その質問を会場の参加者にもコーディネーターが向けてくれたらもっと良かったのでは…。（理由は、参加者の中にもパネラーより相談経験や不登校の子どもと親として接して、または格闘している人もいるのでは…）後半は少しは向けてもらえたが、前半で欲しかった。

◇　相談指導の先生のお話にはびっくりした。もっと親の意見また子ども自身が声を出していることに耳を傾けて欲しい。本などもたくさん出ているはず。

シンポジストには、親だった人、不登校だった人なども入れて、こうされたことはつらかった、こういわれたことはいやだった、等の意見も入れてほしい。された側の意見がないのが、話が一方的になっている。

◇　学校に要因があるのではなく、家庭内のトラブルで不登校を起こしている子がいます。毎日、母親が一緒でないと学校生活が送れず、担任も他の指導上困っています。

さまざまな相談ができる場や、自由に学んでいける諸施設がなくては、学校のみでは対応できず、解決ができにくい。

◇　不登校の対象が高学年の方のお話が多かったように思います。基本的な考え方や接し方については低学年も同じように思いますが、低学年の人のお話も伺えたらと思っています。

◇　学校の教師として、日頃、友人関係づくりの下手な子が多くなっていることに気づき、その背景としての受験戦争、塾とおけいこに追い立てられて遊ぶひまもない子ども達のことを考えていた。不登校の子ども達にもしも心を開ける友達がいたらどうなのかという問題をもって聞かせてもらった。いい話でした。

◇　日々、学校と家との往復で追われている身には、教員外の世界にすむ方々の話を聞くことができる機会を作っていただけるのは、大変ありがたいです。視野が久しぶりに開いた気持ちです。

竹内先生のお考えが、とても自分にとってはためになった気がします。

◇　「不登校をめぐって」を開いて下さり、ありがとうございました。いろいろな考え方にふれる事ができる素晴らしさを感じていました。

・中西さんの話には、共感するところが大きく、これから考えていく上で、心の中にとめておきたい事がたくさんありました。答えは、もらえないけれど問題は大きすぎて、つかみどころがない様だけれど、一人一人が少しずつ自分の生活の場で考え、動くことで、変化はあるかもしれません。またそんな一人ずつが続がっていく事ができれば…と願うばかりです。

・一つの目的に向かって脇目もふらず突き進むという事は、大事な事や、肝心な事を見失わせる危険を含んでいるようです。何もかもを効率で考えるあまり、私たちは行きつく先を見失い、もっともっと…と考え、心休まる時がなくなっているのかもしれません。その考えをそのままに、生きている子供たちにあてはめ様としたところからまちがってきたのでしょうか…。

・この会で、小学校の先生が「学校でできる事・家庭でできる事・いつ頃から民間施設にまかせるのか」等をとても真剣に質問されているのを見ながら、この様に熱心な先生がいる事にありがたく思う反面、何かの手引き…はっきりとしたものさし…答えがないと動けない私たち大人の姿を見た思いもした。

・自分が動くことが吉とでるか凶とでるか、こわくても心を見つめ寄り添う事で、少しずつ伝わってくる事があるのでは…。

いつの頃からか、人の心に寄り添うという事をも見失っているのかもしれません。不登校の子供の事を考えるという事は、自分の人生（大人の）を見つめ直すことであり、現在、競争社会に身を置く人にとっては、自分の価値観や自分自身の存在価値をも打ち砕かれる程の事の様な気がします。

自分を見つめ直すチャンスを与えられた事に感謝しつつ、この様な会がまた開かれる事を…、また教文研に関わる皆様、お体を大切に…。これからも私たちの力になっていただける様、心からお願い致します。

まとめにかえて

一九九二年二月二十九日、相模原教育会館で行われた公開シンポジウム「不登校をめぐって――子どもの心を探りよりよい対応を考える」につづいて、同年十月二十四日平塚市教育会館において第二回シンポジウム「不登校をめぐって――子どもたちの明日へのメッセージ」が開かれた。このブックレットはその第二回の記録である。コーディネーターとして、まとめにかえた感想を述べておきたい。

サブタイトルの違いからも判るように、今回は不登校への対応から一歩ふみ出して、不登校児の明日へのメッセージを語りたいという意図があった。前回に引き続いてシンポジストをお願いした竹内先生は、私たちの意図を汲んで二つのケースについて積極的な話をして下さった。

中学生の不登校患者として出会った青年との再会は極めて劇的な状況である。竹内先生と患者時代の彼との関係は表面的には良くなかった。その彼がこれだけ重い内容を話しに来たのである。それも成功者として回顧談をしに来たのではない。彼にはまだ精神病で自立できない母という深刻な問題をかかえているのだから。

癌の手術をして亡くなった少女の話も胸を打つものだった。私はかねてから医療と教育は本質が似ていると感じてきた。まず人間を相手にした営為であること。そして医師や教師は患者や生徒に対して知識的にも権力的にも優越している。その優位性にあぐらをかいている限り、何の稔りもないという思いだった。仏教に菩薩行（ぎょう）という概念がある。これは仏の光明を差別や貧困に苦しむ人々に届ける行（ぎょう）なのであるが、そのとき相手に光を届けること（献身）と相手から学ぶことは表裏一体であるという。つまり相手に光を届ける気持ちなしに相手から学ぶことはできないし、相手に学ぶ気持ちなしに相手に光を届けることはできない。これが医療や教育に共通な本質ではなかろうか。

竹内先生の話は単なる不登校の問題を超えた、医療、教育、人間の生き方の本質を私たちに教えてくれた。そう言えば竹内先生は、良い意味での宗教家的雰囲気を持っておられると思う。

原始女性は太陽であったことを自ら示して下さったのは阿部先生である。多少の反発もあったようだが、それは阿部先生の実践家としての自信と個性が生んだものだろう。今回のシンポジウムの活性化に最大の貢献をしてくれたのは、阿部先生のユニークな語り口であった。大人たちの心配をよそに、現実の子どもたちは阿部先生の個性とエネルギーに巻き込まれて、元気を回復していると思う。現在の教育界に欠けているのは、むしろ阿部先生のような個性的な教師であると、私は考えている。

医師、教師とは異なる立場から発言していただいたのは中西さんである。中西さんがまず言われたのは「子どもたちの大人へのメッセージが聞きたい」だった。医療や教育には治癒、回復、成長といったプラスの方向性はあるが、どこか強制を伴ったイメージがつきまとう。中西さんは不登校も含めて、あるがままの子どもの存在を認め、その居場所を確保しメッセージを受けとめるべきであると主張しておられる。そのためには子どもに対する人権意識を高め、日本の社会を豊かな成熟したものにする必要があると言う。今の子どもを取り巻く状況を見るとき、貴重な提言である。

今回のシンポジウムで良かったのは、立場や考え方が少しずつ違う三人をお迎えし、お互いに議論ができたことである。不登校児にとっては病院も学校もフリースペースの居場所もすべて必要であり、それぞれの場所によい大人が存在することが望ましい。そのことを実証したシンポジウムだった。

もう一つ嬉しかったのは、不登校の子どもを持つ親御さんの発言があったことである。それも父親と母親の両方の気持ちが聞けたのだった。何かとプレッシャーのある中で、勇気ある発言をして下さったお二人に深く感謝をしたい。

一九九三年四月一日

菅　龍一

※お詫び

当日、会場付属の録音装置がなかったので、スタッフがポータブル録音機で音声を記録しました。そのため録音に不鮮明な部分が多く、シンポジストの方々には後日加筆していただきましたが、フロアから質問をいただいた部分につきましては再生が不十分となりました。深くお詫びするとともに、ご容赦をお願いいたします。

第二回教文研教育シンポジウム記録

不登校をめぐって Part2

――子どもたちの明日へのメッセージ――

1993年3月1日

発　行：神奈川県教育文化研究所
横浜市西区藤棚町2－197
神奈川県教育会館内
☎ 045－241－3531

印　刷：㈲神奈川教育企画
☎ 045－253－3435

KYOBUNKEN